
女王騎士物語の世界で生きる

千変万化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王騎士物語の世界で生きる

【Nコード】

N1493Y

【作者名】

千変万化

【あらすじ】

目が覚めると赤ん坊、平凡な日常を過ごしていた主人公が、から人生をリスタート。いわゆる転生というものを経験してしまったようです。せっかくだから楽しむことにします。この世界でどんな物語を描いていくことやらう？ご覧ください。

プロローグ（前書き）

この小説は二次小説、転生、オリジナル設定を含み、原作破壊等を含みますのでご注意ください。

そういうのがダメな人は、お帰りいただいた方がよろしいと思います。

また、批判、酷評をされる方もお帰り下さい。

それ以外の方は歓迎します。楽しめるかどうか分かりませんが、お楽しみください。

プロローグ

世の中そうそう変わるもんじゃない。政治家は碌なことをせず、税金上がって給料下がる。

泣ける世の中になつたもんだ。

心から喜べる時間は趣味や食事、睡眠（布団の中）ぐらいだろうか。

でも、そんな世の中や自分にどこか満足してる部分もあるにはある、住めば都とはよく言ったものだと思う。

趣味ができる時間があるだけ幸せと思つべきか。

そんなことを漫然と感じながら、仕事帰りに夕飯を買いにコンビニへと足を運ぶ。

お？初めて見る弁当だ。これにしよう。

そして、早く帰ってゲームしよう。

明日への英気を養うために。

そんな平々凡々な日常が続くもんだと思っていた。

ふと目が覚めると、知らない天井だった。

「（あれ？ここどこだ？）あう？ あうあう？」

ん？まともに喋れない！？

というか、身体も思い道理に動かない……。

「男の子、でかした！これで我が家も安泰だ！！」

「ええ、わたくしも嬉しいですわ。あなた、名前はどんなさいますか？」

うん、ちよつと落ち着いて整理してみよう。

周りに知らない男女、知らない天井、喋れない動けない現状。

……！！

赤ちゃんになつてる！！

いわゆる転生でことなのか！？

「トンヌラというのはどうだ」

うん、そんな某大作RPGでつけられるような名前は嫌だ。

「その名前もいいですが、ローラントというのはいかがですか？」

トンヌラと比べるなら断然こちらの方がいいに決まっている。

賛同しておこうか？

賛同する？しない？

Yes or No

Yesだ。よく分からん現状だが、自分の名前なら納得のいく方がいい。

「ローラント、ロランか悪くないが、やはりトンヌ「おぎゃー！！」
……ローラント「あい！！」……トン「みぎゃー！！」ローラ「あい！！」

(無念だ。何がいけないのか、いい名前だと思ったのだが。)

……よし、今日からお前の名前はローラント、

ローラント「アウスバツハだ！」

無事トンヌラという名前を回避できたようです。

状況の把握も大変だけど、うん、

今日はもう寝よう、寝て目が覚めると、いつも道理の生活に戻っていると感じて。

というか、この身体赤ちゃんのためか眠いんだ。飯より睡眠の気分だよ。

お休みなさい。

プロローグ（後書き）

かなり短いですが、一区切りとします。

なお、更新は遅いレベルになるかと思えます。

完結はさせるつもりなので宜しくお願いします。

第一話 0歳から3歳だよ（前書き）

年齢とか、はつきりとは語られていないけど、ある程度の予測からすると16歳とみています。D 3みたく。エルトの幼年時代の年齢予測と7年後を加味すると、一番しつくりきます。気にしないように。

あと、口調が変わっていくのは精神が肉体の年齢に引っ張られているためです。

第一話 0歳から3歳だよ

あれからさらに数日が経過しました。

ども、転生？生まれ変わり？を果たしたローラント＝アウスバッハです。

ロランと呼ばれています。0歳児です。

数日間、時間をかけて考察した結果からいうと、

- 1・間違いなく、現状は赤ん坊
- 2・前世の知識あり、但し前世の名前など思い出せない点も存在する
- 3・言葉はなぜか理解できる
- 4・自分は侯爵家の一人息子らしい
- 5・女王がいる国とのこと、現在の女王は即位1年目とのこと
- 6・???

両親や侍女の会話で判明しました。

うん、数日経ちました。身体は赤ちゃん、心は大人です。どこそこの名探偵ですね。

俺、いや私は男いや漢です!!!

母さん、美人です!!何がとは申しませんが、恥ずかしいがそれ以上に嬉しかったと言っておきます。

母さん、いや母上は大層なものをもちしていました。父上ナイスと言っておきます。

というか、父上も何気にイケメンのようで、将来は期待がもてそうです。

この数日間で祖父、祖母達の偉大さなど、侯爵家の役目なども聞かされました。赤ん坊に語りかけるようにおっしゃてくれました。まあ、家の人達はこちらが会話を理解してるとは思っていないだろうけど。

ここで、重要だったのは、祖父、祖母達が元女王騎士クイーンナイトだったということ。

女王騎士クイーンナイト、聞き覚えがあります。これ聞いた時は、頭が真っ白になりました。

うん、昔少年ガ ガンで掲載されていた、女王騎士物語のようですね。

生まれ変わっただけかも、と思ったけど、漫画の世界に転生したようです。

中世ヨーロッパ風ファンタジー、好きな作風でした。

劇的な最終話だった気がします。

そう、気がするのです。

思い出せない!!!

キャラの人間性とかは覚えていても、ストーリー部分、根幹が思い出せないなんて!!!

最低限の知識しか思い出せないとは、不完全な転生のようです。

いや、よく似た世界ということも在りうるので、断定はしたくない

いところではありませんが。
どちらにせよ、せめて身体がバグキャラであってほしい、今日この頃です。

つまり6は、今いる世界が半確定、但し原作知識は微妙、ということですよ。

前世の最後の記憶については、え〜と、コンビニに行って、その帰りに確か誰かにぶつかって・・・、
うん、通り魔に無差別に殺されたか、恨まれて殺されたのか、
前者の方が個人的にはいいな（世間的に）、まあどっちも結果は変わらないけど。

うん、過ぎたことを言っても仕方ない。前世の名前も何故か思い出せないの、ロランとしてこの世界を生きることになります。むしろ、せつかなので今の世界を楽しみたいところです。

ポジティブに行こうかと思えます。

今、自分がいるのはアルシリア王国という国で、
このアルシリア王国は周りを大国に囲まれた小国だが、代々聡明な女王によって統治し、
女王騎士団をはじめとする騎士団によって王国を統治、
人々が野盗や魔物に怯えて暮らす世にあって、アルシリア王国はその平和を保っている、とのこと。

確定！！この話を侍女に聞いた時に確定。女王騎士団物語の世界のよ

うです。

うん、八つ当たりとして、美人の母上から生きる糧をたっぷり貰うことにします。

ちなみに、北東にエルムガンド公国、東側にギスカーン帝国、北西にワールーク帝国、

西および南西にマクノイス魔法皇国、南側は海に面しており、ヤパーナ国という島国も南南東辺りにあり、いろんな国に狙われるの位置取りです。

いずれも国土広いです。大国です。それぞれ独自の騎士団や文化があります。

こういうのは何故かしっかり思い出せません。人物像や余計な点はしっかり分かります。

でも、ストーリーは思い出せない……!!。

まあ、現状ほとんど何もできないので、限界まで動いて寝て、食べる、いや飲む？、排泄を繰り返し、身体の成長を促したいところです。

あと、休憩中などはマナを感じ取ることを試んでいます。

そう、この世界はマナと呼ばれる力が存在してるんです。人が持つ心の力、

精神エネルギーをマナと広義し、強い意志や精神力がマナの源とされています。

また、大気や自然の中にも大地や風、炎といったマナが存在します。まあ、他の世界？という魔力やチャクラ、オーラみたいなもの思っしてほしい。

これを感じ取り行使することが当面の暇つぶし兼修行となると思います。

身体は今は特に何かできるわけではないし。

「あうあう（腹減った）」

「あらう、ロランちゃん、お腹がすいたのかしらう？」「あい！」
「じゃあ、ちよっと待ってねえう……」

はあくい、このことで飲みます、寝ます。動いては疲れ、マナを感じ取る練習をする。

こんな感じで生まれたての頃を過ごしましたとき。

3年経過しました。

3年かけて変わったことや分かったことについて、まずは説明を。

というか、うん、授乳時とか返事していたので、聞き分けのいい子とか、

あまり泣かず、聡明な子とか、早い段階で喋ったり、歩き出したりしたので、今では、神童扱いです。

「さすが我が子だ！」とか

「さすが我が孫！！」とか、
「ん〜、ロランちゃん可愛い〜」 などなど、褒められる、煽
てられる。

うん、心が子供ならダメになりそうなぐらいです。

ちなみに言語も英字のようで、読み書きができる点が輪をかけてい
るようです。

次に、両親について。

父上の名前はウィリアム・アウスバッハ、母上がミューズ・アウス
バッハ といえます。

父上や母上は女王騎士クイーンナイトではなく、父上は王国騎士団の一般騎士予備
役、

母上は元王国参謀部作戦部だったそうです。現在母上は主婦？なの
か、常に家にいてくれています。

それらの部門は、女王騎士クイーンナイトになれなつかた人や事情のある人、
その部門の才能があるもので構成されているそうです。

父上は、アウスバッハ領の内政をしっかりとりたいのを理由に、
女王騎士団クイーンナイトの試験自体参加していないとのこと。

小国の貴族といってもそれなりに土地を保有し経営させているよう
です。

母上は作戦立案の才能が理由らしいです。

うん、母上を少し疑ってしまってる自分があります。

ちなみに、母上は出産を機に辞めたとのこと。

祖父たちについて。

父方の祖父祖母の方が、祖父がヘンリー＝アウスバツハ、祖母はエレン＝アウスバツハ
母方の祖父祖母が、祖父がアーランド＝ロアーヌ、祖母がミリー＝
ロアーヌといえます。

ロアーヌ領も父上が経営してるとのこと、母上は一人娘だったらしい、いろいろ揉めたとか。
ロアーヌ、アウスバツハは隣接しているので、昔から関係は深いみたい。

ヘンリー、アラン爺ちゃんとエレン婆ちゃんが元女王騎士クイーンナイトだったそうです。
でも、ミリー婆ちゃんが一番強いとのこと。

なんでも、潜在マナ量は凄まじかったが、マナの発現が若いときは下手だったらしく、

当時の試験に受からなかったとのこと。
で、潜在マナおよびマナの総量が多いためか、見た目は10代後半ぐらいに見えます。サイ 人かよ！

見た目が婆ちゃんじゃないです、姉さんですね。姉さん、事件です。
(ネタが分からなければ後免ね！)

女王騎士団クイーンナイトの試験は、15歳から20歳迄の間で1度しか受験できないとのこと、

5年に1度試験が行われるそうです。5年違うとだいぶ違う気がするの
のはなんでかな？

ちなみに、マナの成長は20歳ぐらい迄しか伸びしろが良くないのが理由らしいです。

やっぱり、15歳の時に試験と、19歳では結構変わる気がする。
女王騎士クイーンナイトはアルシリア王国のなりたい職業毎年だんとつ？1らしい

です。

他には、ヘンリー爺さんはマナのコントロールがとても上手いらしいです。

隠居している、祖父や祖母達はよく顔を見せに来ます。可愛がられてる反面、

(特に)祖父達はクイーンナイトにする気満々です。
騎士聖典関係の本を大量にそれとなく置いていきます。(初めは絵本だった。)

うん、ある程度の歳になったら、扱かれそうです。まあ、強くなれるのは望むところですが。

次に、この国の爵位について。

女王や王女を頂点として、六大公爵家が存在し、侯爵、伯爵と続いていくようです。

ちなみに六大公爵家の方々は、この国の看板騎士団の女王騎士団クイーンナイトを纏める団長だったり、

王国騎士団を纏める將軍だったり、王国参謀部の参謀長だったりします。

エリート中のエリート、各部隊のお偉いさんですね。

うん、地味に我が家は上流貴族のようです。

それと、自分の容姿について。

銀髪のようにです。顔は整っていてカッコいい系になるみたいです。

母上たち曰くですが。

そうそうマナですが感知するどころか、3歳今現在、発現できるようになりました。

感知の方は毎日心掛けていたからか、1歳の時ふと感じ取れるようになった。

運動量もかなり増えました。うん、身体の方はチートかもしれないと思います。

1歳でマナを感知し、3歳でマナの発現ができるとか有り得ません。この世界では。

まだ小さいからか、貴族だからか神童扱いといえど風呂は一人では入らせてくれません。

母上や侍女が必ず一緒にします。ありがたく、目の保養を・・・、ということ、

風呂場で母上と入ってます。水が邪魔です。しっかり見たいと思います。

身体を洗っている時とは別に見たいんです。マナを発現すれば水を吹き飛ばしたり、

風を起こせたり、肉体強化できたりできるとアラン爺ちゃんが言っていましたし、

そんな記憶もあります。という訳で、何事もチャレンジです。

- ドツパーン -

水が弾けました。

コマンド

謝る

泣きつく

とぼける

じつくり観察する

心は男（漢）です！まだ、小さいので許されると思います。母上ですし。

あ、母上は無事だよ、無傷だよ。まあ、余すところなく見ましたが！

「ロランちゃん、水無くなっちゃた〜」

うん、母上天然です。物凄く眼福ですが、

・・・うん、ミリー婆ちゃんも一緒に入ってた。見た目は姉ちゃんだけ。眼福です。

・・・、今のでマナの発現についてはれたかな？

気づかなかった。ステルス機能搭載？気配を消していたと見るべきです。

もしかしてミスった？早まった？ピンチ？

姉さん、ピンチです！姉さんいないけど…

うん、次話へと続きます。

第一話 0歳から3歳だよ（後書き）

次話で多少人物設定が分かると思います。

うん、くくくは口癖みたいなもんです。

第 話より原作みたいに章にした方がよかったかも…。

次話予告も原作みたいにはっちゃけてもいいのかな？

第二話 前門のボス、後門の天国は孔明の畏だった（前書き）

大まかなストーリー自体は壊さず、原作の雰囲気を保てるように心掛けています。

多少違った意味で原作破壊を行うこともあります。

とりあえず、原作のメンバーは6歳くらいから登場いたします。

全体の大体の骨組みはできました。

まあ、楽しんでいただけたら幸いです。

第二話 前門のボス、後門の天国は孔明の畏だった

緊急コマンドだ!!

逃げ出す

戦って記憶を失わせる

知らないふりで徹底する

婆ちゃんに抱きついて誤魔化す

泣いて誤魔化す

婆ちゃんの貧乳について質問する

婆ちゃんの胸を弄いじくる

如意棒、出番だぜ

ルパンダイブ(すでに裸だが)

話題の転換を試みる

コマンド多いな。いくつか、即死コマンドがある気がするし。

3歳で最強相手に戦いを挑むのは無謀だと思います。

お胸関係は即死する気配が濃厚です。

ん〜、器用に泣けるか？

否、見破られそうです。

逃げ出す？

高確率でまわりこまれたと表示されそうです。ボスからは逃げられないと相場は決まっています。

ならばこれだ

婆ちゃんの胸を…

つて勇者か!!!!

それはやばいです。

無理！無駄！無謀！

まだ死にたくないです。

思考するのもそろそろ真面目に選んで動かねば。

これだ!!!

婆ちゃんに抱きついて誤魔化す

「あ、ミリー婆ちゃんだ〜。お婆ちゃん。うわあ〜お肌すべす

べだね〜」

いけるか？

「ミリーお姉さんと呼ぶよ」の

そこか？そこに反応するのか？だが、いける。

「ミリーお姉ちゃんて母上の母上なんでしょ？なんでそんなに綺麗なの？」

「ママは〜。ママはどお〜」

母上という名のクリーチャー参戦です。

「母上も美人だよ。僕幸せ〜」

「ありがとウランちゃん。可愛いわ〜、大好き〜」

背中が気持ちいい。GJ俺！！

「ミューズ。とりあえず侍女に湯を再度張らせるが良い」
「はあ〜い」

・チリーン・

ミリー婆ちゃん、じゃなくてミリー姉ちゃんが居たことはスルーですか、そうですね。

ベルを鳴らして侍女を呼ぶ母上。

「ところでロランや、今のはお前じゃの？マナを発現させたのじゃな？」

スルーできなかつた。orz

「な、何のこと？」

「惚けなくともよいわ。内に秘めたるマナを精神力で一気に解放する、つまりマナを放出しなければ、
水を弾くなど今のお前の筋力ちからでは無理じゃよ。

そうか、その年でマナの発現ができるのか。そうか、そうか」

ふふふと笑っています。いやな予感が止まりません。

「い、今、初めて出来たの！」

「そうか、初めてか。さすがわらわたちの孫じゃ。アランも喜ぶのお」

こっちはNoです。

・
・
・

新しく湯が張られました。ちょっとしたエロ心が人生を左右しそうな状況です。

うん、なるようになれと思おう。話を変えよう。

「ミリーお姉ちゃん、アラン爺ちゃんとヘンリー爺ちゃんってどっ

ちが強いのか？」

「ふむ、一概には言えん質問じゃの。」

素の実力はほぼ互角じゃの。長期戦になればヘンリー、短期決戦ならばアランの方に分があるのか」

「何で？」

「母様ばかり構ってもらってずる〜い」

母上ってムスコン？

「お前はずっと一緒に居るじゃろうが。」

ふむ、知ってのとおりヘンリーはマナの扱いがとても上手い。

それはつまり体力のペース配分にも繋がる。相手の攻撃を即時に見抜き最低限のマナで防御したり、

最低限の動きで相手を躲す。長期戦になればその差は大きなものとなる。ヘンリーはそれに長けておる。

対して、アランはヘンリーと比べマナの扱いは上手いとはいえん、クイーンナイト女王騎士のレベルで見ると普通じゃ。

だが、マナの総量はわらわほどではないが、クイーンナイト女王騎士団の中でも上位だったのか。

マナの総量が多いということは、一撃に込めるマナを多くできるということじゃ。

また、マナが多いということは大技の連発も可能にする。長期戦になると不利だとわかつているなら、

大技でたたみ込む戦法を取れば良いということじゃ」

「でも、それだとアランお爺ちゃんの方が強いんじゃない？」

「ロランちゃん〜ん」

ふにふにと母上にほったを弄れています。密着して柔らかいです。

「例えばじゃが、100のmanaを使用する技を100のmanaで使用出来る者と、

150使わなければ発動できぬ者とは、100のmanaで使用できる方がmanaを温存できる。

いくらmanaの総量が多いとはいえ、疲弊するのが早かったら長くは戦えなくなる。

つまり前者は最低限のmanaを使用し、相手の攻撃を躲したり、いなしたりするだけで絶対的有利な状況を作り出せるのじゃ。

100の技を150の威力で繰り出すには、

150のmanaを使わなければ発動できぬ者は

より多くのmanaを消費しなければならんということなのじゃ」

「つまりヘンリー爺ちゃんは、躲したり、いなしたりして最低限のmanaで大技を防げて、

アランお爺ちゃんは、防がれないように、より大きな攻撃や躲されづらい攻撃をしなくちゃいけないんだね。うにゅ」

「うむ、そうじゃ。ロランは聡明じゃのお。

…ミューズ引つ張りすぎるでないぞ」

「そんなことして〜ま〜せ〜ん」

いえいえ、絶賛ふにふに中です。

「さて、わらわは先に上がるぞ、やることもあるでな。のぼせんよ
うにゅの」

なんだろう、自分に関係してる気がする。

まあ、今さらどうしようもない。諦めよう。

絶対正義〜 と母上が歌っている。

まあ、うん、考えて行動すべきかもね。

その後、母上に抱き締められながら、風呂を楽しんだ。

） Side ミリ ）

面白い、予想以上にあやつは面白い。

気配を消してここ数日見ていた甲斐があったというものじゃ。

神童か、そう言われるのも無理はない。読み書き程度ではどうかと思っとたが、さすがにこれはのう。

わらわがマナの発現を行うのには、数年かかった。

満足に行使できる頃には20をとっくに超えておったわ。

我が孫ながら実に良い。

見たところ、マナの総量や潜在能力も高い。

鍛えればわらわを軽く超える可能性がある。

新しい楽しみができたものだ。

うむ、善は急げじゃ。

アランやヘンリー、エレンにも手伝わすかの。

夫達は喜んで手伝いそうなのお。

笑いが止まらぬのお。楽しみ、楽しみじゃ。

） Side out ）

バタンッ！！

「アーランド！！アーランドはどいじゃー！」

「ん？どうかしたのか、ミリー。ミュージズのところに行っていたのではないのか？」

そんなに慌てて…何かあったのか？」

「あつたとも！！とても楽しいことなの。アラン手伝え！！！」

なんだ？嬉しそうに、手伝え？訳が分からん…。

・ ・ ・

「さすが我が孫！天才だな！いいぞ、我らで立派な女王騎士クイーンナイトにしよ
うぞ」

「ああ。ヘンリーやエレンにも手伝わせるぞ。やるからには徹底的

「じゃ」

「ふん、まあその方がより孫のためか、いいだろう、奴らにも手伝わすか」

「よし、早速エレン達のところへ行くぞ！」

我が嫁ながら行動が早い。

まるで新しいおもちゃを見つけた子供のようだ。

そこが可愛いのだが。今からだと到着するのは夜中だがまあいいか。

「ヘンリー、ヘンリー達を呼べ」

「ですが、旦那様や奥方様はもうお休みになられていて…。」

「いいから、アランが来たと伝えて叩き起こせ」

「わ、分かりました。少々お待ちくださいませ」

ヘンリーの執事達が下がる。

夜中だから寝てるは仕方ないな。

ま、エレン殿には悪いが勘弁してもらおうか。

「早く来んかのお、眠くなってしまうわ」

そうだな、ついでに今日はここに泊めてもらおうか。

・
・
・

「アランにミリーさん、こんな時間に何の用だ！？ 儂らは寝ていたんだぞ。」

「まあまあ、あなた落ち着いてアーランドさん達の話聞いてみましょう？」

「いや、しかしだな」

「しかしもかかしてもない。いいから聞け！」

息びったりだな。いったいなんだというのか。
変な用だったら儂はアランを殴る。

「…その話は本当か？」

「わらわが確認した。間違いない」

ミリーさんが実際に見たか…。ううむ、3歳でローランドがマナを使用したか。

早すぎやしないか？ そりゃあ、クイーンナイト女王騎士にはなってほしいと儂も思つとたが。

「あらあら、凄いわねえロランちゃん」

「そうだな、さすが儂の孫といったところか」

「俺の孫だからだ！」 「なんだと！」

「やめんか！！」

でどうする手伝ってくれるかの？」

二人だけに任せるのは不安だし、仕方ないな。
なにより可愛い孫ローランドのためか。

「いいぞ、協力しよう。エレンはどうする？」

「私もお手伝いします。ロランちゃんのためですから。」

「そうですねえ、それぞれ担当を決めて、教えてみるのはどうかしら？」

「それぞれの得意分野を教えるということか、エレンさん」

「ええ、その方が無駄が少ないし、ロランちゃんも分かり易いでしよう」

確かにその方が効率的だな。

「ふむ、ならばアランが基礎トレーニングと格闘術、ヘンリーがマナのコントロール、

エレンが戦闘戦術及び剣術指南、わらわがマナの総量向上やその他応用全般を教えるのはどうじゃ」

「ええ、そんな感じで。でも、まだ3歳だからいきなり無茶なことをさせちゃダメよ、ミリー」

「わらわとてそんなことは、分かっておるわ。(まあ妥協はせんがのお)」

なんか間があつた気がするが…。

決定か、細かい事は明日にしてほしいな。

「よし、だいたい決定だな、詳しくは明日だ。それとヘンリー今日は泊めてもらうぞ」

「客間を使うと良い。ところでウィリアムやミューズちゃんはこの事を知っているのか？」

「ウィルは知らんじやろう。ミューズは気づいておる」

まあ、あの頭脳で、生まれてからほぼべったりだからな、ミューズちゃんは。分かって当然か。

「まあ、些細なことは明日朝一にじや。午前中にはミューズに話をつけたいでの、楽しみじや！」

相変わらず、行動が早いなミリーさんは。

明日からか、確かに楽しいかもしれないな。

可愛い孫強化計画スタートといったところか。
ローランド

. . .

翌朝、昨日帰ったはずのミリーお姉ちゃんとアレン爺ちゃん達が4人揃ってやって来ました。

いやな予感的中ですか？

真実はいつも一つ。名探偵コン

「喜ベロラン、今日からわらわ達4人が立派な女王騎士クイーンナイトになれるよ
う鍛えてやるぞぞ」

うん、ミリー婆ねえちゃんはノンストップのようです。

次話へ続くよ

第二話 前門のボス、後門の天国は孔明の畏だった（後書き）

ミリーに対する禁句は 貧乳、ババアです。

父親が空気ですね。そのうち、なんとかします。

ヴァレリーのダーク・ギアの魔黒装の名前ですが、

2つ3つ候補がありますが決まらない…。

まあ、ダークギアが出てくるのは9〜10歳以降ですけど。

原作で名前のないグラン・エンチャントギア六大聖騎装はほぼ決定です。

違和感はたぶん少ないと思います。

まあ、これもまだまだ出てきませんが。

原作始まるまでが長いので、許してください。

第三話 レベルアップ開始(前書き)

多少削って控えめにしています。

若い頃に筋肉をつけすぎると成長の妨げになるのですが、そこはファンタジーです。

第三話 レベルアップ開始

〜前回までのあらすじ〜

ローランドニアウスバツハ、通称ロランです。どうぞよろしくお願ひします。

どうやら自分は突如転生し、女王騎士物語の世界に生まれ変わったようです。

ある程度の知識はあるが、肝心な点は思い出せなかった。だから、前向きに気にしないことにしたんだ。

現在3歳になった。自分はアルシリア王国の侯爵家嫡男のようだがなんとなくだが自分が子供であることの違和感がなくなっている気はするけど、

それでもエロ心は男であるからには仕方ないと思う。

1歳の時から、マナの感知はできるようになっていたんだけど、3歳の現在、

美人の母上と一緒に風呂に入っている時に、エロ心からマナを発現することに成功したみたいだ。

まあ、心のどこかで母上ならバレないかなと思っていたんだけど、最強って言われているミリー婆ちゃんねえがその場に居たんだ。

その結果、マナを発現したことがバレてしまった。うん、フラグを踏んだね。

その後、ご機嫌で帰って行ったミリー婆ちゃんねえ。不安だ…。あと母上はすごく綺麗で柔らかかった。

そして翌日、爺ちゃん達4人が揃ってやって来た。

…どうやら、今日から修行が始まることになったみたいだ。

これからどうなることやら…。

どんな騎士を目指すか、それは言い換えるならどんな大人になりたいかということ。

「（え〜と、うん）悪い人達や悪い魔物から、力のない人や善良な市民を、そして大切な人達を守る正義の騎士になりたい…かな」

「なら、わたたちがそうなるよう導くことを約束しよう」

なに、無茶なことは出来る限りさせはせんよ、と付け加えてくれます。

確かに祖母一人だと逃げ出したい、という考えは思い浮かぶ。

なので、その言葉で安らぎというか安心感を得た気がする。

でも、出来る限りという点が不安だけど…。

強くなりたいたいという気持ちや、

この世界で生きていく不安や期待、恐怖などのいろんな感情は同じくらいの割合で心に存在していた。

そして、同じ強くなるなら誰かを守るために、
そしていつかできる（と思う）大切な人を守る力がほしいと思っ
ていた。

その力は、自分がこの世界で生き抜いた、と心から思える証のよ
うなものなのかもしれない。

どこかで中途半端に終わった前世の未練があるのだろうか。

「母様、ロランちゃんにはまだ早すぎると思つての」

母上が祖父達に待ったをかける。

自分の今の母親はとても美しく優しい。ムスコンの気があるため、少々自分むすこに対して甘い気はするが…、今の自分にとって、とても大切な人だと思う。だから守りたい。

だが、母上は自分が強くなることには反対のようだ。

「ミュージズ、ちょっとこっちに來い」

ちよいちよい、と祖父アラランと祖母ロアヌに母上ママが連れていかれる。

Side ロアヌ

「母様、私の考えではまだ時期じゃないと思つての」

「ふむ、その心は？」

「もっと、女王騎士について憧れを抱かせたり、騎士聖典を覚えさせたり」

ママのことを好きになるように仕向け…じゃなくて、マナーとか

をいろいろ教えてる途中なの」

「「チラツと本音が混じつとるではないか!!」」

洗脳か、と突っ込みを入れながら、話を続ける。

「ミュージズ、それは鍛えながらもできることだ」

「それに、孫にマザコンになられても困るのぉ」

ミュージズにはロランが可愛くて仕方ないみたいだ。それこそ、無駄に計画的になるくらいに。

「むう、でもでも」

「なら、ミュージズもより詳しく教養を教えてやれ」

「ん、それなら……」

「それにロランは、先ほどの言葉通り小さいながらも確たる信念を持っておる」

「母親なら例えどんな事情や考えがあろうとも、子の信念を後押しし、

成長させてやる道を選べミュージズ」

「分かりました」

渋々といった感じで納得するミュージズ。

「女王騎士団クイーンナイツの試験には筆記もあることじゃし、

それに上級小等学校までに最低限のマナーは身につけておかんならんしのお」

「という訳だ、初めからお前がそれ以外の適任者に任せる予定ではあった」

「なればお前にやらせる方が都合がよいと思ってるのう」

「他人には、任せません！」

娘の孫に対する自分達以上の溺愛ぶりに別の心配が湧いてくる。

「「ウィルにも構ってやれよ」構うようにの」「」

夫婦仲が悪くなつては、元も子もない。

「ちやんと考えてますう」

どうやら計画的犯行らしいな。

まあ、何はともあれ話がついた。

） Side out ）

しばらく何かを話し合った後、母上たちが戻って来た。

「ロランちゃん、今日からママ達と一緒に頑張りましょうねえ」
「うむ、6歳から行くこととなるアルシリア王国上級小等学校に入るまでには、
きっと一人前にしてやるぞ」

…なにを祖父達は話したんだろう？

あの、天然だが自分の意見を曲げない母上が納得させられたなんて…。

さすがは母上の両親といったところなのだろうか？

そして、さりげなくだが学校に通うという事を聞かされた。

全く考えなかったわけではないが、変な気分である。

アルシリア上級小等学校、どんな学校だろうか？

少し考えてみるが、ちょっと想像がつかない。少なくとも前世の学校と同じなわけないだろう。

それと気になった点も一つ。

母上は《ママ達と一緒に》と言ったようなの？

「ねえ、エレンお婆ちゃん、お婆ちゃん達は何を教えてくれるの？」

「…そうねえ、私は剣などの武器の扱い方や武具を用いた戦闘や戦

術を教えてあげるわ、ロランちゃん」

まずはエレンお婆ちゃんが教えてくれる内容が判明。

エレンお婆ちゃんって武器の扱いが上手いってことかな？

元女王騎士^{クイーンナイト}だし、やっぱり強いのかな？

少なくとも弱くはないだろう。

「ところでロランちゃん…、ミリィは姉^{ねえ}ちゃんなのに、私はお婆ちゃん…。」

呼び方を変えましょう？。」

「エ、エレンお姉^{ねえ}ちゃん…。こ、これからよろしくお願いします。」

「ふふふ、ありがとう」

「なんじゃ、妬いておったのか？」

「ええ、それはもう」

その空気というか、滲み出る雰囲気からおそろしい何かを感じた気がする。

やはりただのお婆ちゃんではなさそうだ。

「俺は基礎体力や筋力の向上、素手での格闘術を指導する」

次に、アラン爺ちゃんが答えてくれた。

確かに、武器を持たない状況下の戦闘では、己の身体能力や格闘

術が生死を分かつ。

だが、確か昨日祖母ミリーねえちゃんがヘンリー爺ちゃんと素の實力は互角と言っていた。

疑問に思ったので聞いてみる。

「でも、アラン爺ちゃんとヘンリー爺ちゃんは素の實力は同じって昨日聞いたよ？」

「阿呆か、俺の方が身体能力や格闘術では圧倒的に強いわ」

「阿呆はひどいぞ。」

「やかましい。クソ、こいつは小賢しい技や俺のマナから攻撃を読み取るのが上手いだけの話だ」

「アランの行動は読み易いからな」

ヘンリー爺ちゃんにそう言われ、ますます気を悪くする爺ちゃん。

「（お前が異常なだけだ）」「えつとつまりアラン爺ちゃんは格闘術や身体能力は強いってことでいいんだよね？」当たり前だ！！現役の女王騎士クイーンナイトにも負けるつもりはない！」

たしかに老人の肉体には見えない。

これだけ自信があるなら自分も得るものが多いはず。

「よろしくねアラン爺ちゃん」

「任せておけ」

「（父様のせらてる〜）わー」

爺ちゃんは機嫌を直してくれたようだ。

母上がなにか喋ろうとしていたが、ヘンリー爺ちゃんが遮った。

「わしはマナのコントロールや扱い方等について教えてあげよう」
…ぶう」

今度は母上が不機嫌そうだ。

以前から聞かされていた通り、

ヘンリー爺ちゃんはマナのコントロールがとても上手いらしから、
納得と思う。

さっきアラン爺ちゃんが言っていた、

小賢しい技やマナからの行動予測といったものも教えてくれるかも
しれない。

「ローランドならわしの全ての技を習得できる。そんな気がするよ」

ヘンリー爺ちゃんの技は豊富らしいので覚えがいがある。

戦いの幅も増えそうだし、とても面白そうだ。

「できるかどうか分からないけど頑張る」「ああ、できるとも」

優しく笑いかけてくれる。

うん、頑張ろう。

そしてついに痺れを切らした本命が釣れた。

「ママはねえ、教養全般と聖典なんかの知識を、教えてあげるねえ」

やはり聞き間違いはないようだ。

まあ、拒否はできないかな。どのみち、一般人だった自分が貴族のなんたるかなんて、知るわけがないのだから。聖典にしても何の役に立つかわからないし…。

貴族の教養って自分が思う教養と異なるかもしれないしね。

「母上もよろしくね？」

「任せてえ」

ギュッと抱き締められる。

柔らかさを堪能しつつ疑問が浮かぶ。

肉体強化、マナコントロール、教養等の知識、武器に関する扱い方等、格闘術

大体のものがそろっている気がする…。

しかし、一人まだ何をするのか発言していない。

むしろ、主犯格で参加しそうな人物である。

「…ミリー姉ちゃんは？」

「わらわはその他いろいろ応用担当じゃ！楽しみにしておくが良い」
応用、物凄く幅広い解釈ができそうだ。

ま、無理そうな内容ならちょっと、加減して貰えるようお願いします
ればいいか…。

「お手柔らかにお願いね、ミリーお姉ちゃん」

「心配は無用じゃ！気にせず励んで強くなればよい」

「うん、頑張る」

その後、教える順番など話し合い、修行を行うことになった。

かくして修行は始まった。

初日の今日は、ヘンリー爺ちゃんから始まった。

葉っぱを浮かべたタライの水にマナを流して葉っぱだけを動かしたり、弾く修行を行うことになった。全体にマナを通すのと一点を狙って操作するのは難易度が全然違った。

どうしても多少周りの水を巻き込んでしまった。でも、初日には上出来以上だったらしい。

次に、アラン爺ちゃん。

全力の七割くらい速度で数時間走った後に筋力トレーニングを行った。

これまた、数時間も走ったことや、筋力トレーニングの結果が予想以上だったらしい。

驚かれてしまった。この分だと格闘に関する事に早めに入れそうだとされた。

でも、すでに疲労困憊です。正直、今日はこれ以上無理だと思った。

次に昼食がてらマナーを少し母上から指導してもらった。

昼食は上薬草や薬草を用いた料理が出てきた。疲労困憊だったはずの体が回復した。

薬草の認識を改めた方がよさそうだ。間違いなくこれから毎日のメニューに組み込まれるだろうし。

味は独特だけでも…。そのうち、毒の耐性をつけるための食事も出したいらしい。

母上がまた反対したけど納得させていた。

マナーがてらの昼食の後、引き続き母上から騎士聖典の勉強をさせられた。

覚えることは多そうだった。

次に、エレンお姉ちゃん。

初めに、武器は何を使いたいと聞かれたので双剣と答えたので片手剣をある程度のレベルにした後、双剣に移るようになった。

理想は槍や弓なども一通り行い、特性を把握しておくこと方がいいらしい。

まあ、それは双剣に移ってからある程度つかえるようになった上で並行して覚えていくらしい。

とりあえず初日の今日は、刃を潰した鉄の剣で素振りをする事になった。

木剣からじゃないのが驚きだった。

なんでも、午前中の筋トレで鉄の剣でも振れるのではという話になったららしい。

事実振り回せた。でも、木剣のように、狙い通りに素振りはできなかった。

まずは思い通りに素振りができるようになった後、体の一部のように剣を使えるようになれば、

片手剣の技などを教えてくれるらしい。少し楽しみだ。

余談だが、エレンお姉ちゃんはアルシリアの戦姫とか武神とか言われてたらしい。

剣や槍を含めた全ての武器の達人らしい。

家の爺ちゃん達って凄い人ばかりかもしれない。

最後はミリー姉ちゃん。

ミリー姉ちゃんは自然のManaをより詳しく感知できるように瞑想を言いつけられた。

火とか風など属性のManaを感じるということらしい。意外にマトモだ。意外すぎる。

エレメンタル・セイバー
精霊剣を使うための基礎中の基礎らしい。

エレメンタル・セイバー
精霊剣とは、己のマナと大気や自然に存在するマナの力を借り同調

し発動する

ハイ・クインナイツ・アーツ
上級女王騎士剣技のことを指す。

でも、属性のマナを敏感に感じ取れるようになっても、

エレメンタル・セイバー
精霊剣はマナのコントロールが一定のレベルに達するまでは試すの
は禁止された。

暴走させないための処置らしい。

初日だがある程度いろんなマナを感じ取れた。小さい頃から努力した成果だと思う。

これも想定外だったらしい。

まあ、こんな感じで修行の日々が始まった。

思っていたほどの無茶ぶりはなかったので一安心だ。

・
・
・

と考えたのがいけなかったのか、甘かったのか。

数か月後…

崖を背にオークと対峙する自分がいた。

待するがよいぞ

次回 第四話 初めての死闘

期

第三話 レベルアップ開始（後書き）

次話初めての戦闘描写…、少し緊張。

世界設定？（前書き）

反論は認めない、受け付けない。

まあ、参考程度のものでご覧下さい。

世界設定？

1. 暦について

1月から12月

カプリコーンの月

アクエリアスの月

パイシーズの月

アリエスの月

タウラスの月

ジエミニの月

キャンサーの月

レオの月

バルゴの月

ライブラの月

スコルピオの月

サジタリアスの月

日数は365日で変わらないものと考えてください。

女王騎士団クイーンナイツの試験は5年に1度のパイシーズの月3日

2. 属性について

命 (操と医)
雷 土 風 水 炎

原作に出てきた属性である。

これをマナで解釈すると

闇 光 雷 土 風 水 氷 炎

命の操と医は闇と光になります。
無手の状態で水のマナを感知し集める技術があれば水の精霊剣エレメンタル・セイバー
アクアセイバーは使用可能です。
無手からの水の剣の精製ですね。
ちなみ、月のマナも存在します。
マナとは万物に宿るものである。

3・物質について

クイーンナイフ
女王騎士団で使われる聖騎装の主原料

オリハルコン
魔法金属

オリハルコン
魔法金属は精霊銀に特別な技術を施して精製する。

軽い、硬い、マナの伝導率が高い、能力付与が可能（これが様々な聖騎装の能力の基となる）、精霊銀以上に希少価値がある。

ミスリル
精霊銀

超希少金属。マナの伝導率が高く、丈夫で、錆びない金属。

世界設定？（後書き）

これで、公的にホーリーセイバーやダークセイバーも使用可能だ！！
後悔はしない。

金属についてはレアな2種のみ掲載
決して考えてないわけじゃないから悪しからず。

第四話 初めての死闘（前書き）

豚は鼻がいいです。トリユフを探すのに犬を使うのは、豚だと見つけた瞬間食べてしまうからです。

D のオークと風 のシ ンのデブータ系を足した感じのオークです。

気にしないで下さい。

第四話 初めての死闘

〜前回までのあらすじ〜

ミリー＝ロアー又じゃ。孫が神童と呼ばれていたので、しばらくじっくりと観察した結果、マナを発現しおった。なので、アランやヘンリー、エレン達と孫を鍛える計画を実行したのじゃ。

やることなすことわらわの想像以上の結果を叩き出しおったわ。凄い孫じゃのう。

修行を初めて数か月経ち、さらに成長した孫を括目して見るが良いぞー！！

えー、ただ今オークと向かい合っています。

醜悪な豚の魔物、オーク

大きさは人の大人と変わらず、頭は良くないが腕力は人より強力。武器を使い人を襲う魔物として有名。

色はピンクや茶色が一般だが色が濃い個体ほど強力とされ、黒などの色は非常に危険な存在とされる。

「ブフオ〜！！！」

どろじてこんなことになった!?

時は数時間前に遡^{さかのぼ}る

修行を始めてからすでに数か月が経過し、修行内容もいろんなものを行うようになっていた。

今日は領内の森の近くの村に来ている。

ここで今日の修行を行うのだろうか？

「今日は狩りを行うとするかのう」

狩りが今回の修行みたいだ。

「狩り？何を狩るの？」

「ラビという獣を狩ってきてもらっぞ」

ラビ

小型のウサギのような獣でおもに草食だが食べ物が少ない時やピンチの時は発達した前歯で

攻撃し小動物を狩ったり身を守ったりする。色は黄色が一般、乳白

色が最も能力が高い種とされている。
人間の騎獣用のビッググイヤーといわれる体が大きく攻撃性のない獣
とは全くの別物である。

「（まあ、今の自分なら大丈夫かな？）うん、わかった」

「この森のその他の危険な魔物は、わし達が排除しておいたから安心するといい」

「マナの流れを感じながら見つけ仕留めるのよ？」

「怪我しちゃだめよ」

「わらわ達はあの村で待つことにする。何匹でも構わん、狩ってくるのじゃ」

今回は母上もすでに納得済みらしい。

母上達は近くの村で待つことにするようだ。

「今回はこれを使え」

【鉄ロングソードの剣を手に入れた】

刃挽きしていない真剣は初めてだ。

少しの緊張と嬉しさ、興奮が生じる。

「ありがとう爺ちゃん」

深呼吸し、気持ちを整える。

「よし、行ってくるね」

祖母達の声援を背に受け森に向かった。

・ ・ ・

数十分が経過しただろうか？ラビどころか小動物すら見つからない。

生物のマナを周囲に感じない。どうやら、この辺りにはいないようだ…。

少し、奥に進むか？

…ん？

…何かいる！！

「キユ？」

いた！！ラビだ！

可愛い…が今回は狩ることにする。

「ごめんね」

謝りつつも剣を振り下ろす。

「キユ〜」

早い！！躲された。

あ、逃げる！？逃げ足も速い！

「待って！！」

ラビとの追っかけっこが始まった。

(こいつ速い！！)

想像よりずっと速い。

マナから次の移動先が分かってもなかなか追いつけない。

その後もしばらく追っかけっこは続いた。

「ん、動きが止まった？崖か！！」追いつめたよ」

崖にラビを追い詰めることに成功したみたいだ。

「キュキュ」

反転して前歯で攻撃してきた！！

ガキンと音が響く

咄嗟に前歯を剣で受け止め、

「ここだー！！」

そのまま、地面に向かって剣を叩きつけ、ラビを両断した。

「うわ、服や顔に返り血が付いちゃった」

返り血を浴びてしまった。生臭いというか、気持ち悪い。

ラビを狩ることに成功したので、すぐに村へ戻る準備をする。

血抜きをしてラビを抱えて歩き出そうとすると、森からそれは現れた。

「ブフオ！」

血の匂いを嗅ぎつけてやってきたのか分からないが、オークと呼ばれる豚っぽい魔物が現れた。

（うん、不細工だ）

「ブフウー」

こちらに向かって歩を進める。

（血の匂いを嗅ぎつけたのか？偶然来たのか…。いや、それよりも狙いはラビか自分なのか…。）

試してみるか。

「やっ」

ラビを少し離れた木めがけてオークに見えるよう投げつける。

「ブフオ」

「うおっ」

ラビに反応は示さずに、こちらに対して手に持った槍を振り下ろしてきたので、咄嗟に躲す。

どうやら狙いはこちららしい。

だけど今ので森側を背にすることができた。

「ここは逃げる」

魔物いるじゃん！めっちゃ危なそうなのが。

ラビはまた後で何とかするとして逃走を試みる、

…がしかし、

「ブフア〜！！！！」

なんて奴だ、一瞬で大木を折って投下しやがった。

しかも狙いが正確だ！逃げ道を潰すと同時にこちらも狙って投げた。

「危なっ！！」

間一髪で躲したがその隙に追いつかれてしまった。

こいつ強い。オークってこんなんだっけ？

こいつから逃げ切るのは難しいかもしれない。

「(だったら)やるしかないだろう！！」

オークとの闘いが始まった。

村にて

「もう、狩り終えたところかのう」

「ラビは警戒心が強いから見つけるのに時間がかかるかもな」

「動きも速いのがいたりしますものね」

「わしはあの子なら問題ないと思うぞ」

「ロランちゃん、早く帰ってきて〜」

ざわざわ

皆で談笑していると外が騒がしくなった。

「騒がしいのう、なにがあった。」

「あ、あの冒険者たちが森でオークに襲われたそうです」

そこには4名の冒険者たちが傷だらけで横たわっていた。

「なにがあった！！オークがこの森に現れたのか！？」

アランが比較的傷の少ない冒険者に話を聞く。

「は…はい、この村に向かう途中で色の濃い茶色のオークに襲われて、戦ったのですが、

敵わず煙玉などアイテムを駆使して逃げてきました」

「まずいのう」「まずいな」「オークか…」「あらあら困ったわねえ」

「ロランちゃん」

ミューズが森へ走って行くこととする。

「待たんかミューズ！お前が行ってどうする！わらわが行こう」

「ふむ、わしも行くのか」

「うむ、アランとエレンはこの場と周囲の警戒を頼むぞ」

「「わかった(わ)」」

(出会ってなければよいがのう……。)

「ではすぐに行くかの、ヘンリー」

「わかった」

一抹の不安を抱え、ヘンリーと共に森に向かった。

「うりゃあ」

右から袈裟懸けで斬りかかる

「ブラア!!」

が槍の薙ぎ払いにより受け止められ、弾き飛ばされた。

(マナで強化しても腕力は向こうが上か!!)

力で負けているのでまともに打ち合うのは避けた方が良さそうだ。

（なら、「ブフォ」

キーン、キーン

攻撃は受け流す！！）

打ち合うたびに火花が飛び散る。

打ち合いながらも受け流しチャンスを待つ。

「ブルアー！！」

小振りの相手を削る攻撃が続く

打ち合うたび火花が散る

「ブルアー！！」

大振りの突き！！ここに合わせる！！

「今だ！！」

受け流さず躲す要領で払い抜けて斬る！

「ブフィ〜」

こいつマジで強い。咄嗟に急所を避け鎧で受けるよつ身を捻りやがった。

結果、薄皮を斬るぐらいの感触しかなかった。

(なんで、魔物が鎧を装備してんだよ!!)

「ブヒィー!!」

心の中で毒づきながら、オークの攻撃をいなす。

「せい」

躲しつつ攻撃を入れるが鎧に阻まれたりし、致命傷が与えられない。

「たあ!!」「ブヒィィー!!」

ツ!!」

(く、三段突きから薙ぎ払いか!!)

「フ、ハツ、クツ、ぐあ、痛う〜」

薙ぎ払いを完全にいなしきれず、手が痺れ木に体ごと弾かれた。剣を放さなかったのが不幸中の幸いか。

「ブヒィィー!!」

止めとばかりに攻撃を繰り返すオーク。

「舐めるな」

ザシュツ

「ブアアー!!」

カウンターで叩き込んだ一撃は少し浅いが鎧を破壊し肉を切り裂いたようだ。

「よし、勝負はこれからだ」

しかし、こいつ自体の防御力も大したものだ。

今の一撃は会心の一撃だと思ったのに致命傷には至っていない。

もっと、限界までマナを込めて攻撃しなければ今の自分の攻撃力では倒せない。

「ブガアアー!!」

多少なりともダメージを与えたからか、激昂したようだ。

ブン、ブオンッ

攻撃自体は重くなったが、その分軌道が読みやすくなった。

キイイン、キイイン

(受け流すだけでも、手が痺れる!長くは受け続けられない!!)

極力攻撃は躲し、大振りを誘うことにする。

「ブハアアー!!」

二段突き、薙ぎ払い、回転突き

怒涛の攻撃で襲いかかる。

「ぐ、や、はつと」

こつちも初めての命の奪い合いに体力の消耗は激しい。

次のチャンスを最大限に生かす。

「ブルアア　！！！！」

来た！！大振りの一撃

ここに全力の一撃を合わせる

「うらあー！！」

ズバン

カウンター気味で入れたマナを全力で込めた一撃は、オークの右腕を斬り飛ばした。

「ブオオオー！！」

さすがのオークも大ダメージだろう。そう思い、マナを消費した疲労感から少しの油断を招いた。

ブンッ

と音が聞こえ振り返ると残った左腕で殴り掛かってきていた。

反転してガードするが少し反応が遅れた。

「ぐあ　！！！」

結果、痛恨の一撃を受けてしまった。すぐに反撃できるとは考えが及ばなかった。

(痛え〜！やばい、やばい！！たぶん肋骨がやられた！！)

「ブアアー！！！」

かなり向こうも頭にきているようだ。

このままではこちらの方がが悪い。

今の状態では、長くは躲せない。

何かないか、マナを込めた全力の一撃で腕を斬り飛ばすに至った。

しかし、肋骨が今の状態で同じ攻撃ができるか分からない。

このままでは分が悪い。なにか、手はないのだろうか？

足りない分の攻撃力を補うなにか……………。

……………あつた、エレメンタル・セイバー精霊剣だ！！

フレイムセイバー炎の精霊剣ならオークに対して効果抜群だろう。

問題は使ったことがない事。その一点のみ。

(ここで死んでたまるか。まだ、始まったばかりなんだ)

「……で、終われるか……!!」

心の闘志は消えていない。ならば、暴走しても構わない、ここで死ぬくらいなら

禁止されてる技を使っても生き抜く。

幸いにも火花を散らしたおかげに必要なマナは十分だ。

「ブファ　!!」

怒りに身を任せた、だが子供の身には致死の一撃をオークが放つ。
(死ねない、まだ死ねない、ここで生きると決めたんだ!!)

力を貸せ、炎のマナよ!!)

「フレイムセイバー!!」

残る最後の力を振り絞り、炎の精霊剣エレメンタル・セイバーで袈裟斬りに斬る。

暴走せずに使えたが、もうマナが残っていない。これで倒せなければ……

ブシユウ、ゴオオー

「ブウアアー!!」

斬った先から炎がオークを包み込み、周りの木々すら激しく燃や
す。

(そのまま倒れる!!)

こっちはもう限界なんだ。もう、まともに立つことすらできない。

しばらくたつと、火が消え、静かになった。

オークが黒こげになり、じっと立ったまま動かない……。

死んだのか？

そのまま倒れてくれ！！

「ブアアー！」

オークが雄たけびをあげた。

（くそが…）

俺はそこで意識を失った。

≡≡≡
M i s s i d e
-

「ヘンリーどのあたりじゃ」

「ふむこっちの道だ、急ぐぞ！」

「ああ、いやな予感がするのじゃ！！！」

こっぴつ時の感は当たる。無事でいるのじゃぞ！ロラン！！

「ミリー、あそこだ！！あそこに全力で行け」

ヘンリーが木の上に突如飛び乗り指をさす。

わらわも木の上に乗リ確認する。

「（木が燃えている！！）あそこか！！」

全力で急行する。自然な火災ではありえない。数日前は雨が降ったのだ。

炎のManaが多量に存在するわけがないのだ。

孫が炎のManaを何かしらの方法で使用したに違いない。

ラビ相手に禁止したことを孫がするとは考えにくい。

まず、間違いなく話に聞いたオークと闘っているのじゃろう。

「無事でいるのじゃぞ！！」

「ブアアー！！」

右腕のないオークが黒焦げで吠えて、ロランの前に立っている。

「そこまでじゃー！！」

何とか間に合った。

気を失ってはいるが、命に別状はなさそうじゃ。

孫の無事を確認し、オークに対峙する。

なるほど、このオーク、体毛から察するにオークの中でも割と強力な個体だったようだ。

「む？かかって来ぬのか？」

…こやつ、死んでおるのう」

立ったまま絶命したようじゃの。

…なんじゃ、つまり、孫一人ロランで討伐したということか。

この年でこれほどのオークを仕留めるとは…。

気絶してるので、辛勝といったところか。

む、鉄ロングソードの剣が少し熔とけとるのう。

かなりのマナを込めてフレイムセイバーを使用し、暴走を起こさなかったが剣の方が耐えられなんだということじゃな。

「全く、凄い孫じゃのう」

わらわは感心しつつ孫をそっと抱きかかえた。

） S i d e
o u t
）

次回第五話へ続く

ロランちゃん、早く目を覚まして

第四話 初めての死闘（後書き）

戦闘は少し短くしました。長時間闘う子供っていうのもねえ…。
物足りなかつたら申し訳ないです。

まあ、楽しんでいただけのなら幸いです。
エレメンタル・セイバー
精霊剣の補足説明を次話に入れることにします。

第五話　その後と急成長（省略）且つ入学前夜なのですよ（前書き）

設定等が受け入れられないなら退室した方が双方のためですよ。

そうでない方は稚拙ですがお楽しみください。

遅くなり申し訳ございません。

途中放棄はしませんので。

第五話 その後と急成長（省略）且つ入学前夜なのですよ

～前回のあらすじ～

ロランちゃんのお母さんのミユズよ。ロランちゃんは物凄く愛らしいの、
どんだんかっこよく成長してるの。
もう可愛くて可愛くて。

・
・
・

（以下略）

で、最近成長著しいロランちゃんは、修行で森に狩りへ行く
そうって話になったの。

反対したけど、母様や父様が森の危険な魔物は片したみたいだし、
大丈夫だと思ったの。

けど、傷ついた冒険者の一団が滞在していた村に来て、なんで
もオークが森に現れたらしいの。

ロランちゃん、無事に帰ってきて！！

「う…ん…？あれ？ベッド？」
「ロランちゃん…！」

起きてすぐに母上の胸に抱き締められる。

「ふむ、目が覚めたか」

「ふふ、そうね」

「ミュージズちゃんや放しておやり、苦しそうだよ」

「ぶはっ、えっと、たしかラビを狩って、その後…」

母上の豊乳から解放され考える、あ、母上今度は後ろから抱き締めるようだ。

「覚えておるかのう？」

「えっと、オークが現れて、逃げようとしたけど闘いになって、オークの腕を斬って、攻撃くらって、フレイムセイバーを使ったけど倒せなくて、

気を失ったんだっけ…。そっか、負けちゃったのか。

えっと、ミリー姉ちゃんが助けてくれたの？」

自分の未熟さが少し悔しく俯く…。

「うむ、助けはしたがそれは違うのう」

ん？どういふこと？

祖母の言葉に顔をあげる。

「えっと、僕が見たときはオークは…」

「立ったまま絶命しておったのう」

なんだって？

立ったまま？

…それって、え？

「一人でオークを倒したんだよ、頑張ったねローランド」

勝つ…てた？

あのオークはあの時死んでいた!？

「ロランちゃん」

母上が優しく抱き締めてくれる

「…うわあぁ〜ん!!」

それによって緊張が切れたのだろうか、

悔しさと嬉しさとよくわからない感情がごちゃ混ぜになってこの日初めて大泣きした。

あれから数日経過した

怪我はすでに治ってしまった。

骨は折れたと思ったけど、ヒビが入っていたただけだった。

打撲の痛みと伴って折れたと勘違いしたみたいだった。

特薬草なるフルコースを毎食いただいた。

うん、薬草のフルコースは凄いいと思いき知らされたよ。

今回のオークについては祖父達も想定外の事態だったらしく、

本当に無事でよかったとのことらしい。

ちなみに、俺が倒したラビはヘンリー爺ちゃんが回収し、

肉は食事へ、毛皮はミリー姉ちゃんの私物に、尻尾は母上のアク
セサリーになったようだ。

オークと闘ったことにより、修行内容も安全且つ厳しくなるらしい。

今回のような狩りには必ず誰かが一緒にいることが決定された。

ヘンリー爺ちゃんはより細やかなマナコントロールを教えてくださいなようになった。

相手のマナを読んで闘う術等についても教え始めてもらえるみたいだ。

アラン爺ちゃんはより強靱な肉体をつくること、体術の修行を始めた。

肉体改造は地味に一番重要なので、地道に頑張るしかないと思う。

辛い筋肉痛も薬草で治るし…。

耐毒の修行も行ってみたいだ。

初めは弱めの毒を薄めてはじめるらしい。

少し怖い…。

エレンお姉ちゃんは双剣の修行に入るようだ。

片手剣の技と双剣の技も教え始めてくれるようだ。

クロスブレイクとか十文字斬って縦横十字か斜め十字の違いだけだと思っただけ…。

ともかく、地力をつけるために頑張りたい。

ミリー姉ちゃんは今回のことから、

本格的に^{エレメンタル・セイバー}精霊剣の修行を行ってみたいだ。

今回は使用出来たが、本来^{エレメンタル・セイバー}精霊剣は女王の剣を媒介に使用する技

らしい。

これは、女王の剣はクイーン・セイバーマナの伝導率が非常に高く、普通の剣はとても低い、

普通の剣で行うのは、よほど効率よくマナを集め集約しないと発動は不可能なためらしい。

普通の剣ではマナを伝導しづらく、マナを剣に溜めにくいからだ。

今回使用出来たのは剣に込めた莫大なマナの量が剣を覆い

マナの伝導の促進剤のような役割を果たしたためと言われた。

マナの潜在量が多く、正しく感知し集め、発現を狙い通り行い、マナのコントロールを行う、

どれも相応の技量や才能が必要だ。どれか一つ欠けていてもダメだっただろう。

3歳でできるってチートだね、どう考えても。

ともかく、きちんとした指導の下行われるようだ。

エレメンタル・セイバー
精霊剣の名前は案外適当らしい。

アイシクルセイバーがアイスセイバーだったり、サンダーセイバーがプラズマセイバーだったり。

自分が使いやすければそれでいいとのこと。

個人の自由っていいよね。

でも、本当に強くならなくてはいけないと思う

褒められはしたけど、もしも、オークが複数で現れていたら、

祖母達が助けに来れず、ほかのモンスターが現れたとしたら。

結果論で見れば問題ないが、もしもを考えると今の強さではどうにもならない…。

もっと強くなりたい。

祖父達の修行以外にも訓練を行おう。

もう、だれにも、なににも負けないよう強くなる！

海 王に俺はなる！！

間違った、最強の騎士に俺はなる！！

うん、間違つと締まらないね。


~~~~~

~~~~~

さらに約3年の時が経過した。

【ロランはレベルが上がった】

なんつって、現在6歳です。

少し大きくなりました。

誰に似ているって？

んゝ、あえて言えば、D 5の某少年勇者かな？

俺は薄く輝く銀髪だけど。

髪の毛は母上の要望で伸ばしています。

たしか、メインキャラの一人が灰色に近い濃い銀髪のロングだったと思うので、

いつか切って短くしたい。

以前そう言ったら、母上が泣きそうな顔になったので実行できなかった。

作戦が必要？もしくは時間か…。

要課題だ。

それと、かねてから言われていた通り、

明日のアリエスの月の6日から学校に入学することになった。

以前話に出てた、アルトリア上級小等学校にだ。

うちの領から毎日王都まで通うのは時間がかかるため、

王都にある父上の別邸で母上と暮らすことになった。

修行については一人二日毎に教えに来てくれることになった。

この数年でかなり強くなったと思う。

マナのコントロールは爺ちゃんと同じレベルぐらいにはマスターしたし、

技も強力なの多いし…。

素の実力も大分爺ちゃん達に近づけたんじゃないかと思う。

後は、体が大きくなって、リーチや臂力のさらなる向上を目指す

といった感じかな？

入学祝いには、ミスリルタガー精霊銀の短剣を護身用として2本もらった。

結構な金額がかかったと思われる。

護身用とはいえ自分専用の武器なのでテンションがあがった。

それに対し、少し憂鬱なのは、学校に入ると同時に社交界にも顔を出さなければならぬことか…。

ただのパーティーならともかく、偉い大人達を相手にするっていうのがなあ…。

俺の誕生日自体はつい先日終わったし、身内だけだったから気楽だったけど…。

まあ、なるようにしかならないかな？

深く考えるのはよそう。

うん、気にしない、気にしない。

作戦 気楽に行こうぜ を採用だ。

「明日はどんな一日になることやら」

「ロランちゃんzzzz」

横で眠る母上…。

母上からもマナーや教養をみっちり仕込まれた。

(無駄にしないようにしないと…)

公爵家のご子息やご令嬢なんかも同年代かな？

他の侯爵や伯爵ってどんな人たちだろう？

いやまずは、学校に慣れることを考えよう。

でも、友達って大切だよね。

特に同年代の。

友達100人できるかな。

100人もいらないけどね。

次回へ続く

第五話 その後と急成長（省略）且つ入学前夜なのですよ（後書き）

次話からようやく原作キャラが登場となります。

お待たせしましたでしょうか？

次話の前に閑話で父親を出したいと思います。

あまりに空気なので…。

あと、更新は脇道にそれたり、時間が取れなかったりで、遅くなり申し訳ありません。

週一か月二には最低でも努力します。

オリジナル小説のネタが浮かぶ浮かぶ。

題名だけ出すなら、王が紡ぎ出す物語、通称おつつむ王紡ワタイガや虎人とか。

まあ、まだ書く気はありませんが。

もっと文章表現力が向上したら考えます。

時間的にも並行してやるのは無理だし。

閑話 ウィリアムの考察(前書き)

早く本編すすめるよとおっしゃる方もいるかもしれませんが、勘弁してください。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

閑話 ウィリアムの考察

お初にお目にかかる、ウィリアム・アウスバツ八だ。

俺には可愛い奥さんがいて、息子ローランドが生まれ、我が人生順風満帆だ。

ただ、息子がロレン生まれてから妻が息子にかかりきりで、仕事も忙し
ためあまり会えないのが寂しい。

したがって、息子にも会う時間をあまりとってやれていない。

妻や侍女達に息子のことはほぼまかせっきりなのだ。

息子は生まれた時から、無意味に泣かなかつたり（夜泣きすらト
イレ以外なかつた）、

こちらが喋っている時は黙って聞くそぶりをしていたり、普通の
子よりも早く喋りだしたり、

読み書きを覚えた等の理由から神童と執事や侍女達が噂しだした。

それだけならまだ良かったのだが、3歳の時に義母の前でマナを
発現したようで、

義母や父上達が息子に修行をつけるようになった。

3歳で修行って正気を疑ったが、父上達は本気のようなのだ。

俺は昔4人に稽古をつけてもらったことがあるが、あれは子供ができるものではない。

俺は心傷トラウマになったわ！

心配になったので、父上や義母達に聞いたところ、

「加減はするぞ」

「あらあら、大丈夫よ」

「同じ失敗はせん」

「わらわに任せておくがよい」

息子よ強く生きろ！！

助け舟はだせん…。

それに、妻も息子に何かを教えることになったようだ。妻も嬉しそうだ。

少しだが疎外感を感じたよ…。

なんとか、妻と一緒にいる時間を増やそうと試みたら…

「ミュージズ、ロランのような子をもう一人作るうか」

「ロランちゃんがもう一人…、ダメよっ！！（悶え）死んでしまっわ〜」

なぜだ、何がいけなかった。

妻は息子とよく一緒に寝ているし、マジで寂しい。

「父上…」

息子よ、いたのか。

というか、そんな目で父を見つめるのはやめるのだ。

ただ、妻とイチャイチャしたいだけなのだ。

まあ、他の女を…と考えたら妻が時間を作ってくれているので、
なんとか我慢する。

「父上、頑張ってください」

ポンと肩に手を置かれる。

息子に励まされるとは…。

息子が修行を始めて数か月が経過した頃だろうか、

近くの村の森に狩りに出かけるようだ。

義母達が魔物を掃討したと言っていたので、問題はないだろう。

と、思っていたが冒険者を襲ったオークが森に現れたようだ。

それを聞いた時は、義母達が何とかするだろうと思っていたのだが

息子とオークが遭遇し戦闘になったようだ。

しかも、息子は逃げずに最後まで闘い、オークを仕留めたという
ではないか!!

いくら数か月両親達の修行しうぎんに耐えたとはいえ、有り得んぞ!

3歳の子供が魔物と遭遇し逃走し生き残る、それだけでも奇跡な
のだ。

仕留めただと!! 息子は化け物か!!

いや、化け物の血は引いているな…。4人ほど…。

あの4人を超える化け物になるかもしれんな…。

特に義母には似ないでほしいのだが…。

さすがに無傷ではなかったようだ。仕事を片づけ会いに行くと

「あ、父上」

「ふむ、思ったより元気そうだなロラン」

息子は侍女達に看病されていた。

「ええ、ヒビが入っているだけで済んだので」

「ふむ、特薬草と栄養のある物を手配しておいた。安静にしておけばすぐに治るだろう」

「はい、ありがとうございます」

「うむ。ところでなぜオークから逃げなかったのだ？」

聞いた話では襲われた冒険者も弱くはないとのことだった。

「最初は逃げようと思ったのですが、あのオークから逃げるのは難しいと判断しましたので」

それで闘って勝つのがまた凄いな。

「それで覚悟を決めてか……。ともかく無事でなによりだ」

ガチャ

「あら、あなたあ」

「なんじゃ来ておったのか」

「ウィルか」

「あらあら」

「ウィリアム仕事はいいのか」

席を外していた妻と父上達が部屋に入ってきた。妻達は食事に行っていたのだろう。

ついでに執事が息子の食事を持ってきた。

「仕事を片づけて来ました」

「そうか」

「やはりまだ早すぎるのではないかと思うのですが」
これを機に考えを変えてもらった方が息子のためと思い、言うことにした。

「これからはこんなことにはならんよ」

「そうだこんなことにはならん」

二人そろって断定か、実は仲いいよなこの二人。

「私たちがしつかりと管理するわ」

母上、それが心配なのです。

「その代り雑用はウィルに全部押し付けるでう」

それは今まで通りですか、まさかそれ以上にといいことですか。

「もちろん後者じゃのう」

考えを読まんでください。

「父上…」

何かを言いたそうにこちらを見る。

息子よ、そんな目で父を見るのは頼むからやめなさい。

「ロランちゃん、あくん」

ああ、妻は息子から離れない。

執事から受け取った食事を妻が息子に食べさせようとしている。

…妻を独占して羨ましいぞ息子よ!!

時間ができた時に息子を少し観察してみた。

ふむ、妻が礼節で教えたのだろうか、オハーシの使い方が上手いではないか。

あれだけ上手く使えるのは妻の教え方が良かったのだろう。

妻よりも上手い気もするが…。

あれなら外でオハーシを使うことになっても恥ずかしい思いはすまい。

妻達が傍にいない時というのはあまりないみたいだが、

そういう時は侍女達とよく一緒に過ごしたり、隠れてトレーニングしているようだ。

…あれだけの修行しゅぎんの後にまだ動けるのか。

我が子ながら未恐ろしいな…。

才能ある上に努力を怠らないのだ、大人顔負けに強くなるわけだ。

侍女達と一緒にいる時を見てみた。

…ふむ、息子は巨乳が好きなのか？

そういう侍女と一緒にいることが多いな。

お気に入りにはフレデリカとマリーだな。

この二人は癒し系でもあり、執事達にも人気の侍女だ。

二人も息子相手にはより優しくなるな、あ、抱きつかれた。

息子も妻が嫉妬しそうなくらいに満面の笑みで抱かれている。

これは妻の影響もあるのだろうな、なにせ小さい頃は四六時中妻がいたからな。

む、妻も戻ってきたようだ。妻にも抱きつかれたな。

…息子よ、父は羨ましいぞ!!

さらに数年経過し6歳になる今では、息子はさらに成長して

マナコントロール 父上と同等

マナの総量 義母と同等

身体能力 クイーンナイト スクワイアクラス 女王騎士従騎士級並

装備品 ミスリルダガー 精霊銀の短剣×2
貴族の子供服

使える技等が

片手剣、双剣

払い抜け

十文字斬

双十字斬

剣閃（斬撃をマナで固定し飛ばす遠距離型の斬撃）

クロスブレイク

等々

体術

投げ技

打撃技

等各種

各種精霊剣
エレメンタル・セイバー

フレイムセイバー（炎の精霊剣）

トルネードセイバー（風の精霊剣）

グランドレイズ（土の精霊剣）

アイシクルセイバー（氷の精霊剣）

サンダーセイバー（雷の精霊剣）

息子はプラズマセイバー

と云って使っていた。

???

???

???

その他いろいろな技を父達が教えたようだ。

どんだけだよ!!無茶苦茶ではないか!!

本当に子供か!?

あの両親達がいくら性格的に丸くなったとはいえ、

並の修行ではなかったはずだ。

よく耐えたな、というかますます人外な子供になったな。

もつ、息子関係で驚くのはやめようかな…。

6歳の誕生日にはお披露目はせず高価な精霊銀ミスリルタガの短剣を2本プレゼントされたみたいだ。

妻や父上、義母達は息子専用の武器、しかも短剣といえど、普通の短剣よりも大きいそれを領内で一番の鍛冶屋に精霊銀ミスリルを持ち込み作らせたようだ。

精霊銀もマクノイス産の良質なものを取り寄せたようだ…。

その帳尻は俺にくることになったし…。損な役回りだ。

まあ、息子が喜んでるのが幸いか。

アルトリア上級小等学校に入学するので王都にある別邸に妻と共に住むようだ。

できるだけ、王都に行く仕事を増やそうと思う。

学校に行っている間は妻も暇だろうし、妻との時間を増やせるだろう。

父上や義母達は交代で数日毎に息子を修行させるみたいだ。

これ以上急いで強くすることもないと思うのだが…。

せめて妻との時間を邪魔しないでほしい。

これからは息子も侯爵家跡取りとして社交界に顔を出すことも増えよう。

他の貴族のご子息やご令嬢と会うことになるだろう。

是非とも同年代の公爵家のご子息達とは上手くやってほしいものだ。

友達になってくれればいいことはないんだが。

姫君は同年代だが、おそらくだが学校には来ずに、自宅学習になるだろう。

警護や帝王学等いろんな兼ね合いもあるだろうしな…。

まあ、姫君と息子を会わせるのは姫君の誕生会のパーティーになるだろう。

マナーについては妻が教えているようだし、問題はないだろう。

なににせよ息子のこれからに注目をいったところだな。

息子よ、あまり構ってやれんが父はこれからも見守っているぞ。

リアムの考察了 -

ウイ

閑話 ウィリアムの考察（後書き）

ウィリアム＝アウスバッハ

ローランの父親。

アウスバッハ、ローア＝又領内の内政や雑用を引き受けている。妻が息子にべったりで寂しい。

ネーミングセンスはゼロ。

の父親視点でお送りしました。

次話から公爵家の4人が登場します。

頑張ります。批判は受け付けませんよ。

第六話 出会いと芽生え（前書き）

お待たせしました。

オリジナル設定が入っています。

楽しんでいただければうれしいです。

第六話 出会いと芽生え

～前回までのあらすじ～

どもロランです。

この世界に生まれ変わって、三歳になりいろいろあつて修行が始まった。

それから数か月後オークと闘い、辛勝できたみたいだけど、もっと強くなるうと思う。

生まれ変わってすぐに死にたくないしね。

さらに数年経過し、6歳になった。そこそこ強くなったと思う。満足はしてないけどね。

6歳の誕生日はお披露目はせずに身内で行い、自分専用の武器として精霊銀ミスリルダガーの短剣を

2本誕生日プレゼントとしてもらった。テンションあがった！

6歳になったのでこれからは社交界にも連れ出されるらしい。

貴族に生まれたら仕方ないということと適度に頑張ろう。

そして、アルトリア上級小等学校に入学する日になった。

現在入学式が行われています。

うん、どこの世界でも入学式は退屈ということが分かった。

女王陛下の挨拶でもあればいいのに。

「これからの君たちの……」
話は聞き流し、考え事をする。

考え事というか、後ろの親達が豪華で気になる。

実際感じるマナも大したもんだと思う。祖母達の方が凄いけど。

六大公爵家の方々が4人もいるのだ。

ていうか、母上もそこに加わってるよ。なんか談笑してる。

お知り合いですかー！！

クラス発表はこの後だけど、公爵家のご子息達と別のクラス……にはなりそうにない気がするよ。

クイーンナイト
女王騎士も数人紛れているな。

警護の任務だろうね。

同学年には4人の公爵家のご子息、ご息女がいる。

イージスⅡブリュンヒルデ、銀髪長髪だね、落ち着きがある。
ルカⅡグラム、金髪の短髪でおとなしそうだ。

キャロルⅡルナハイネン、金髪ロールヘアの女の子だ。

ジエダⅡバンニール、薄めの水色のような短髪でつり目が特徴的だ。

うん、原作キャラだね。だいたいの性格ぐらいは覚えてる。

顔は実物の方が美男美女だね。親も含めて。

あ、親たちが口喧嘩始めたよ。

なんというか、うちの子の方が可愛いとかの言い合い？みたいだ。

あ、女王騎士らしき人に止められた。

てか、母上声抑えて…。

あ、入学式終わったみたい。

クラスについて書かれたプリントが配られてきた。

…はい、そうですよねー。そうですよねー。

予想通り同じクラスになりましたとさ。

クラスに移動し、親たちは教室の後ろで見学、先生の挨拶と自己紹介、
そして生徒の自己紹介になった。

公爵家から優先的に手短かに自己紹介させるようだ。

「ブリュンヒルデが嫡男イージス」ブリュンヒルデだ。皆よろしく頼む。…」

堂々としてるな」。性格はイメージ通りかな。クールだけど冷たいわけじゃなかったはず。

あと、男だよ。間違っても女じゃない。髪は伸ばしてるけど。好物は鴨のロースト、と。

「バンニール家次男ジェダ」バンニールだ。俺様に逆らうんじゃねえぞ！…」

うん、こういうガキ大将タイプってどこでも絶対いるよね。

まあ、端から見ているぶんには問題ないかな。からまれると面倒そうだけど。

「ルナハイネン家キャロル」ルナハイネンですわ。私わたくしの下僕いぬになる人は歓迎しますわ。…」

きれいな人形のような。予想以上に可愛い。でも口から飛び出る言葉はひどいと思うよ。

黙っていれば可愛いタイプだね。その性格は改善した方がいいと思う。早急に。

「グラム家次男ルカ」グラムです。皆さん宜しく申し上げますね。
…」

仲良くしましよと美少年スマイル。人当たりのいいタイプだね。幼いからか気弱そうに見える。争いなんかは好まない性格のようだ。

実はこの4人が自己紹介してる間後ろの親が…、いや語るのはやめておこう。

警護担当の女王騎士さん目上の人を諫めるのご苦労様です。クイーンナイト

これを止めるために近くにいたのだろうか…。任務の一環かもしれない、お疲れ様です!!

その後は侯爵や子爵、男爵等ばらばらに座っている順に自己紹介が続いていき、自分の番がやってきた。

「侯爵家嫡男ローランド」アウスバツハです。ロランって呼んでください。

これから皆さん仲良くしてくださいね。好きな食べ物は…」

その他に好きな食べ物、嫌いな食べ物を無難にしておくことにする。

母上鼻から鼻血が…。うん、見なかったことにしよう。

この後も数人続いて自己紹介は終了した。

どうやら今日はこの後、注意事項やこれからの事などの説明を受け終了みたいだ。

一週間後は王都近隣の森へオリエンテーションらしい。遠足だね、懐かしい。

今日はヘンリー爺ちゃんかな？

今日からの修行は誰だろうと考えるながら母上を待ち、帰ることになった。

Another Side

あれが父上がおっしゃられていた神童か…。

帰り支度を整え父上達を待ちながら、考えごとをする。

というか嫌いな食べ物毒料理とはなんなのだ。普通毒は食べないだろうに。

ルカやジェダはヤツをどう見たのか気になるな。

「ルカ、アウスバツハをどう見た」

「えーと、いい人そうですよね」

私が聞きたいのはそういうことではないのだが…。

「ケツ、どうでもいいぜあんな奴。俺様は後ろで鼻血を出してた女の方が気になるぜ」

「あの私達のお母様達とお話していた方ですか？」

「ああ、何もんだありゃ」

そういえば父上とも話されていたな。確かに親しそうだった。

「あれはその噂の子の母親ですよ」「お母様!!」

む、父上達がやってきたようだ。今日のところはこれまでか…。その後私達は父上達と一緒に帰ることとなった。

） Side out ）

今日からの修行はアラン爺ちゃんのようにだ。

「どこからでも来るがいい」

いつもの基礎トレーニングの後、組手を行うことになった。

「今回は勝つからね、爺ちゃん」

「ふふ、頑張ることだな」

今回は筋力差を考慮して相手を疲れさせ動きを鈍くしようとして長期戦を選んだんだけど、

そこはヘンリー爺ちゃんに慣れまくってた爺ちゃんに見事に完敗し

た。

なので今日は短期決戦で全力勝負だ！！

・
・
・

うん、リーチの差は大きいと思う。前回よりは全然良かったが、筋力差とリーチの差は強烈だ。

手数やスピードを利用しある程度闘えたが、まだ純粋な格闘戦では爺ちゃんには勝てないようだ。

「よし、今日はこれまでだ」

「あ、ありがとうございます」

疲れた。爺ちゃんにもいつか勝つ。次は作戦か何か考えようか。

「ああ、（本当に強くなったなあ…。つい本気で相手してしまったぞ。

）着替えて食事にするぞ」

「爺ちゃん今日の食事は何？」

「さあな、ミ्यूーズにでも聞いてくれ」

爺ちゃんは知らないようだ。ていうか今日は母上が作ってるのか？

たまに母上作るんだよね。コツクの仕事を奪う感じで。

たまに出てくる毒料理は嫌だなあ…。不味いつたらありゃしない。

「坊ちやまタオルです」「こちらはお水ですわ」

「ありがとうございます」

屋敷に入り、侍女のフレデリカとマリーからタオルと水を受け取る。

この二人はこの別邸に来るときに母上から自分の専属侍女として連れてこられた。

この二人で良かったよ。侍女達の中でも優秀らしいし、優しいし、
なにより美人だ。

汗を拭きながら二人と談笑し夕飯まで過ごした。

あれから数日たった。明後日がオリエンテーションのようだ。

最近ジエダが喧嘩をしたようだ。

相手はワールIIイジーってやつだった。1対1だったので、感知
はしたがスルーした。

力の誇示といった感じかな？ こどもだねえ。

後、イージスから観察されている気がする。

なんかしたかな？ 話しかけてくることもあるが、なにも粗相は
していないな。

ま、気にしてもしょうがないや。

キャロルは相変わらずかな。てかイージスやルカにも下僕いぬの勧誘してたよ。

イージス達は断っていたけど…。よくやるね。

ルカは女の子に人気かな。公爵家次男だしね。ジエダよりとっつきやすいし。

俺自身は一応一通りの人と話はしたけど、親友と呼べる人は今のとこいない。

焦って作るもんでもないしね。寂しく過ごしてるわけじゃないよ、それなりに皆と話してるし。

まあそんな感じで数日過ごした。

オリエンテーションの日をむかえた。今日は晴天で気持ちいい。ただ今森へ着いたとこだ。先生からいくつかの注意事項や話を聞いて自由行動のようだ。

あまり森の奥に行かず友達を作るといい、直訳するとこんな感じか

な。

さて、どうしようかな？

「この森に泉があるそうですわ」

「だがあまり奥に行つてはいかんと言われたらろう」

「そうですよキャロル」

「行きたいなら一人で行きやがれ」

キャロルが泉に行きたいようだ。イージス達に話しかけている。

泉ねえ…。あ、水のマナが多いからあつちかな。道中に魔物はいない…と。

おそらく女王騎士クイーンナイトが掃討したんだらう。

「つまらないですわ！…！そのあなたついてきなさい！」

はい、指名入りましたー！！

コマンド

ついていく

ついていかない

身代わりを探す

久々の脳内コマンドだな。今回は変な選択肢はないな。

身代わりにするのは身代わりにされた人が可哀そうか…。

…ついていかないでなんかあつても目覚めが悪いしな…、しょうがない。

「聞こえてますの!!」

「ああ、すみません。俺で良ければ一緒にしますよ」

「殊勝な心掛けですわ。では行きますわよ」

「…集合時間までには戻ってくるようにな」

「ダメですよ二人とも! イージスも止めてくださいよ」

「ケツ、ほっとけって」

ルカの反応が普通だろうな。

まあ、特にしたいことも無いし付き合っただけかといった気分にもなった。

「大丈夫ですよ、グラム卿。道中魔物の気配はありませんし、泉を見れば満足もするでしょう。」

「なにかあれば私が守りますし」

「といっても特に問題は起きないだろう。」

「ローランドくん!」

「ルカ、アウスバツハに任せよう」「止めたってキャロルが納得しねえよ」

アウスバツハか、やっぱり名前で呼んでほしいよね。

「あ、私の事はロランって呼んでください。堅苦しいのは苦手なもので」

「なら私の事もイージスでいい。敬語もやめてくれ」

「ジエダでいいぜ、特別に許してやる」

「…はあ、わかりました。」

早めに戻ってきてくださいねロランくん。僕のことルカって呼んでください」

敬語じゃなくなるのは助かる。身分はともかく同じ年としては楽にいきたい。

ジエダの許可が出るとは思わなかったけど…。

「なにをぐずぐずしてますの!」

「んじゃ行ってくるわ」

「ああ、キャロルを頼んだ」

イージス達に見送られ泉へ向かうことになった。

「あ、泉はこっちですよ」

ほつとくと、変な方向に進みそうなので先導することにする。

「あら、わかりますの?」

「ええ、もうすぐつきますよ」

「ふふ、中々優秀ですわね。あなた私の下僕わたくし いぬにおなりなさい」

うん、それは嫌です。

「申し訳ありません。これでも侯爵家嫡男ですので、お受けするわけにはいきません」

「あら、残念ですわ。あなたお名前は?」

「ローランド＝アウスバツハと申します。ロランとお呼びください」

「そう、ロランね、あなたに私の名前わたくしを呼ぶことを許可しますわ。」

気が変わったらいつでもいらっしやい。歓迎いたしますわ」

気に入られたのか？これは。

・
・
・

「この泉ですね」

無事最短距離で到着した。

「噂通り綺麗な泉ですわね」

コマンド

あなたの方が何倍も綺麗ですよ

あなたの瞳に乾杯！！

満足したら帰るぞ雌豚

いやいや例えギャルゲーにしても選択肢おかしいから。何考えてんだ俺…。

でも、確かに透明度が高く綺麗な泉だ。

「水浴びでもしようかしら」

なんですと！！ 水浴び＝裸ですか！！

いやまて、そんなことはしてる時間はないと思っぞ。

「そんな時間はありませんよキャロルさん、って…！！！！！！」

やべ、魔物らしきマナが近づいてきてる。上か！！

「伏せてキャロル」

「グギヤアーツ！」

上から現れた魔物に全力の蹴りを放ち、キャロルを抱きかかえ距離を取る。

「な、なんですあの魔物は」

「ガーゴイルと呼ばれる魔物ですね。危ないので離れてください」

ガーゴイル

皮膚は硬い鉱石並の強度を持ち、普通の剣では小さな傷はつけられても致命傷は与えられない。

角を2本持ち、肉食で翼竜のような魔物。集団で獲物を襲うこともある。

長く生きた個体ほど硬く強靱な皮膚を持つ。

「どつする気ですの」

「あれは飛べるみたいですし、一体ですので倒してしまおうかと」

「た、倒すってあなた……」

「ま、とりあえず離れていてくださいね。アクアセイバー！！」

学校には護身用のミスリルダガーは持ってきてなかったので、

水のマナから剣を2つ作ることにする。

「ギヤアーツ！！」

こちらに向かって勢いよく飛びかかってくるガーゴイル

「クロスブレイク！！」

その勢いを利用し斜め十字に切りつける。

「ギヤアーツ！！」

うん、ほかの魔物より随分硬いな…。

ギガスフロッグとかなら楽に切り裂けるんだけど、これ。中々タフだ。だったら…

「アイシクルクロス!!」

アイシクルセイバーでクロスブレイクを放つ。

アクアセイバーでこれをやると氷の剣になるんだよね。

ま、ともかくガーゴイルの氷像の完成だ。

血の匂いで他の魔物が寄ってきてきても面倒だし、このまま放置かな。

「さ、そろそろ時間ですし帰りましょうか」

「え、ええ。わかりましたわ」

キャラルを連れて、何とか時間までに戻ることができた。一安心してとこかな。

キャラル Side

(な、なんでしたの…今のは)

私はあまりにもあつさり魔物を倒した彼を見ながら、集合場所まで歩いている。

（私、彼に助けられましたの？さっきの水の剣はいつたいなんなのですの…？

魔物を全く寄せ付けないほど強いなんて…。）

様々なことを考える。

（お父様以外の異性に抱かれてしまいましたわ。…たくましい腕の中でしたわね。）

はっ、何を考えているのかしら私は…！

…ともかく、彼は私を助けた。これは事実ですわね。

やはり、私のモノにしたいですわ。容姿も悪くありませんし、教養もありそうですわ。

（何とかならないものかしら？これだけほしいと思っただのは初めてですわ…）

私はそんなことを考えながらじつと彼を見つめて歩いていた…。

t
s

Side ou

第七話へと続く

のせいよねっ
っ
はっ、
ロランちゃんに悪い虫が！！き、
気

第六話 出会いと芽生え（後書き）

ワールⅡイジーが大勢でジエダと喧嘩するのはまた別のお話。

その後、メルⅡイジー登場と…。

今回は公爵家連中と顔見知りになる回と考えていただければ…。

祖父との戦闘は省略…。

祖父達とミュージズが噂？を広めてたりします。

毎度お待たせして申し訳ないです。なにぶん時間が取れないものでして。

批判される方や受け入れられない人はリターンを。

世界設定？（前書き）

世界設定です。

気にしないでご覧ください。

世界設定？

1・通貨に関して

通貨単位 カネー k

1 カネー k が1円くらい。

各国共通通貨、但し各国独自の記念硬貨があったりする。

2・食器について

文化的には中世ヨーロッパのイメージなのでフォークやナイフが主流。

箸ではなくオハークがある。

3・各国の騎士について

アルシリア王国

クイーンナイト　クイーンセイバー　エンチャント・ギア
女王騎士：女王の剣など様々な聖騎装を用いて闘う。
究極の正義を誓い、絶対無敵を誇る騎士。（4で騎士団について説明）

ドラグーン
エルムガンド公国（アルシリアの北東の大国）
竜騎士：竜の背に乗り竜と共に闘う騎士。騎竜一体になれて一人前。四竜将と呼ばれる四天王のような将軍が存在する。

マジックナイト
マクノイス魔法皇国（アルシリアの南西の大国）
魔法騎士：魔剣士とも呼ばれる。特殊な武器を媒介にマナを術式方陣や言霊、印によって統制し、あらゆる術に変えて戦う剣術を用いる。

マジックナイト
ワールーク帝国（アルシリアの北西の大国）
機工騎士：マナをエネルギーパック化し、誰でも同じように扱える装備を用い闘う。
大佐や少佐などの軍階級で構成されている。

ギスカーン帝国（アルシリアの東の大国）
モンクなどの独自の武闘兵団を持つ。素手による格闘戦を得意とし、さらに秘術を用いて己の肉体を爆発的に強化することができる。

サムライナイト
ガ）ヤパーナ国（アルシリア南南東にある大きな島国、首都は神都サ侍：カタナソードと呼ばれる剣を使う一撃必殺の使い手
ニンジャファイター
忍者：ニンジュツと呼ばれる魔法を使い暗殺、隠密能力に長ける

4・女王騎士団クイーンナイツについて

上から順に

騎士団長 シグルド・ブリュンヒルデ

属性7隊長（火、水、風、土、雷、命。命属性には操と医二人の隊長が存在する）

女王騎士

スクワイアクラス

従騎士級女王騎士（新人）

なお女王や王女を警護する護衛部隊ロイヤルガードが存在する。力のある女王騎士から選抜され女王や王女を守ることを第一としている。

5年に1度試験がある。受験資格は15歳から20歳まで年齢制限以外特にない。

つまり生涯で1度きりしか受けられない。

パイシーズの月3日が試験日とされている。

5・アルシリア王国騎士団、王国参謀部について

アルシリア王国には女王騎士団クイーンナイツ以外に12の一般騎士による騎士団が存在する。

一般騎士や一般兵士は女王騎士クイーンナイトになれなかったが力ある人などにより構成される。

王国騎士団

上から順に

將軍 スカーレット・ルナハイネン（女王騎士兼任）

12 騎士団長

一般騎士

一般兵士

王国参謀部

参謀長 キルツ・バンニール（女王騎士兼任）

作戦部と諜報部の二つが存在している。

世界設定？（後書き）

ヤパーナは日本の九州が大きくなった日本をイメージしてください。
世界設定は必要に応じて追加するかもです。

第七話 パーティーと少女(前書き)

あえて端折ったところもありますが
お楽しみください。

第七話 パーティーと少女

〜前回までのあらすじ〜

ロランです。アルシリア王国上級小等学校に入学しました。

…公爵家の皆さんと同じクラスになりました。陰謀を感じた…。

オリエンテーションでキャロルに泉について来いと誘われた俺。

ルカは反対していたけど、イージスやジェダが俺に任せるとのこと
で渋々納得。

イージス達に対し敬語なしの会話ができるようになった。

んで、泉に行ったところガーゴイルが一匹やってきたので、
キャロルを守りつつアクアセイバーで斬りつけた。

でも、致命傷にはならなかったので、

アイシクルクロス（氷の精霊剣でのクロスブレイク）で氷漬けにし、
その場から離れることにした。

変に粉々にして血や肉の匂いに釣られて他の魔物が来ても面倒だし
ね。

その後、無事集合場所に着いたのが前回までのお話かな？

「でも、本当に彼一人で大丈夫でしょうか？」

ルカが心配そうに尋ねる。

「何がだよ」

「もし、森に魔物が現れたら…」

「いや、おそらく問題ないだろう」

「女王騎士が森の魔物を駆逐したに決まってるんだろ」

「うむ、それもあるがロランが守るといったら？」

「ええ、ですが彼も僕たちもまだ子供ですよ？魔物に襲われたら…」

「以前、父上に聞かされたことがある。」

…ロランは小さい時にオークを倒したことがある、とな」

「はあ！？バカじゃねえのか！？嘘に決まってるだろ！そんなもん」

「さすがにそうですね」

「だが、そういった噂があるのは事実だぞ」

「フンっ、公爵家ともあるうものが噂に踊らされてんじゃないよ」

父上がわざわざ話すほどの話だ。嘘である可能性は低いのだが。
ジエダのように信じられないのも尤もな話でもあるか…。

「ともかく、先ほどジエダが言った通り」

女王騎士が魔物を掃討してある。何も起きんだらう」

「だといいいのですが…」

「心配性すぎんだよ、テメエは」

「とりあえず先生に二人がいらないのをばれないようにしなくてはな」

「ええ」「（めんどくせえな）わあったよ」

その後、ロランとキャロルは何事もなく集合時間までに帰ってきた。
ルカの心配は杞憂に終わったようだ。
どことなくキャロルがロランを気にしてるようだが…、
問題はなかつ。

Side out

オリエンテーションから数日たった。

あれ以来イージスやルカ達とはよく話すようになった。

キャロルからもよく下僕？の勧誘を受けている。

ルカやイージス達と一緒にいると女の子が寄ってくる。

二人ともモデルもんね。

でも、その度キャロルから殺気を感じるのはなぜだろうか？

その度話しかけてもツンデレっぽい対応で勧誘してくるので困る。

さらに数か月たった。

この数か月でイージスやジェダの誕生パーティーなど様々なパーティーに出席した。

イージスやルカの家パーティーでは特に何も起きなかった。

ルカの侍女シェリーちゃんだけ、ルカにべったりだったな。

だけど、バンニール家のパーティーでジェダとケンカというか模擬試合しそうになった。

ミリー姉ちゃんがパーティーにてけしかけたようです。

何してんだあの人は…。

結局断りきれず後日、木剣を用意してもらい模擬試合を行った。

うん、勝つかわざと負けるか悩んだんだけど勝つことにした。

ジエダも手抜きされて勝っても嬉しくないだろうし。

勝ったら勝ったで、ジエダの兄であるカルマ＝バンニールに睨まれた。

なんだ兄弟思いじゃんこいつ…、ツンデレ？

もっと態度や言葉で愛情を示してやればいいのにな。

キャロルの家で誕生パーティーでは、

「ロラン、誕生日プレゼントは用意したかろう？」

「…ミリーお姉ちゃん今日も来るの？」

「つれないのう。ふむ薔薇と薔薇の押し花の栞か…、
無難でつまらんのう」

間違っても楽しませるのは祖母ではないと思う。
誰か止めてほしい。

「ふむ、下着なぞどうじゃ」

「なんでだよ！それじゃあ変態だろ！！」

「よしわらわが送っておこうぞ」

「やるなら自分の名前ミリーおねえちゃんでやれよ！！」

思わず全力でつつこんでしまった。

祖母に対する禁句を言わなかっただけ偉いと思う。

「冗談じゃよ…。(あとで執事か侍女に用意させるかの)
「勘弁してよね！」

祖母をなんとかかわして父上や母上達と会場へ到着した。

公爵家のパーティーは豪華絢爛だ。

王女や他の公爵家の方々や様々な人達がきている。

アルマ王女ともイージス達のパーティーで顔見知りになった。

エメラルドグリーンのような髪の色で長髪のお姫様だ。

一見おとなしそうだが、お転婆らしい。

考え事もそこそこにプレゼントをキャロルに渡しに行った。

「よくいらっしやいましたわ」

「うん、誕生日おめでとうキャロル。これプレゼントだよ」

薔薇の花束と栞を入れた箱を渡す。

「ありがたくいただきますわ。…ロラン、私のモノに「無理です」

…まあ、今日はいいですわ」

・
・
・

（あら、あれはキャロルとミューズの息子ね。

…キャロルがここ最近彼の話をする理由がわかったわ。）

「キャロル、せっかくだから二人で踊りなさい」

しばらくキャロルと話していると彼女の母親からダンスを踊れと言われた。

「ちよつとく、スカーレット」

「ミューズ私たちも踊ろうか」

父上が有無を言わず母上をつれていく。

母上はしきりにこつちを気にしていたが…。

ま、ともかくルナハイネン卿がそういうのなら踊るか。

「じゃあ、踊ろうか？」

「も、もちろんですわ!!」

凄く食いつき方だ。

キャロルは踊りが好きなのかな？

キャロルと踊った後は、キャロルや他の貴族、イージス達と談笑して過ごした。

「キャロル、新たにあなた宛てにプレゼントが届いたようですよ」

「誰からかしら、…ロランから？」

（あの時受け取ったはずですけど…？別のプレゼントかしら？）

「こゝ、これは…！」

そこには大人な下着が数着あったそうなの。

そしてアルマ王女の誕生パーティー。

さすが一国の王女のパーティーだ。

豪華で他国の招待客も多い。

他国の王族も見受けられる。

もちろんイージス達公爵家もいる。

イージス達に話しかけようと移動しようとしたら、

ドンッ

誰かにぶつかってしまった。

「すみません。お怪我はありませんか？」

「あ…！うう…」

「本当にごめんなさい。…えっとアルマ姫に話したいのかな？」

「あなた、お兄様の言葉や気持ちが分かるのですか！？」

「うん、まあだいたいは（表情と態度からある程度は）」

「あ…う…」

ふむ、アルマ姫に話しかけたいけど勇気が出せないといった感じかな。

「紹介してあげますよ、えっとお名前は」

「お兄様はアザラークⅡⅡマクノイスと申します。

私はミサⅡⅡマクノイスです」

ッ…！ マクノイス皇家の方々か…！

「俺…いや私はアルシリア王国侯爵家嫡男、ローランドⅡアウスバツハと申します。

ロランとお呼びください」

「う…あ…！」

「お兄様ともども今後よろしくお願いしますねロランさん」

「こちらこそ宜しくお願い致します、ミサ皇女」

ミサ王女は黒髪ロングウェーブの可愛い女の子だ。
将来間違いなく美人になるだろうね。非常に兄想いの子のような。

アザラーク王子は極端に内気な性格のようで、
同じく黒髪でイケメンだと思う。

「じゃあ、早速アザラーク皇子」

「う…！あ…！…！」

無礼かとも思ったが埒があかない感じがしたので、
手を掴んでアルマ王女の前に連れてきた。

「アルマ姫お誕生日おめでとございます」

「あら、ありがとうございますわ」

「さ、アザラーク皇子」

「あ…！うア…！…！」

えっと通訳した方が良さそうだな

「アザラーク皇子もアルマ姫の誕生日おめでとございますって、
またさらにお綺麗になられましたね、とおっしゃられています」

一言付け加えておいた。

「ふふ、ありがとうございますわ、アザラーク皇子」

「…！ウヒヒヒアー！」

…皇子ご満悦のようですねによりです。

「（お兄様の言いたいことを理解するお方）かつこいい…。ロラン様…」

その後姫に誕生日プレゼントを一つ渡し、アルテリーナ女王や公爵家の方々とお話したあと、なぜかいた祖母ミリーねえちゃんにつかまった。

「ロラン実はこの奥に今日もう一人誕生日の子がおる。その子にこのぬいぐるみをプレゼントしてくるがよい」

どうみても壁なんだけど…。

祖母が壁を触ると隠し扉が開いた。

なるほど、マナを遮蔽し特定のスイッチである壁にマナを送り込んで開け閉めする隠し扉なのか。

「この奥にそんな子がいるの？」

「ま、内緒なんじゃがのう。見つからんうちに行くが良い」

何でそんなことを知ってるのか聞きたいことはあつたけど、とりあえず奥に向かう。

細い通路を抜けると一つの部屋に出た。

まるで幽閉されてるかのようだ。

というかそうなのかな。

その部屋には一人の少女がいた。

とてもアルマ姫によく似た女の子が。

「あなた誰？」

「ローランド＝アウスバツハと申します。ロランとお呼びください」
「そう、…あなたも姉さまのお祝い？」

やはりアルマ姫の姉妹、妹のようだ。
今日誕生日ってことは双子かな？

「いえ、実は姫様に会いにお伺いしました」

「私に？なんで？」

「お誕生日おめでとございます姫様」

「あ、ありがとうございます…」

「こちら、プレゼントになります姫様」

「…イルマよ。姫様はやめて」

「イルマ姫？」

「だから姫はつけないで！！お願い」

・
・
・

その後しばらくイルマと話をした。

イルマは王家に流れる自身のマナを制御できず、精神が不安定なため、
ここで暮らさないといけないそうだ。

女王やアルマ王女などが会いに来てくれるのでそれほど寂しくない
とのこと。

でも、やはりどこか寂しそうに見受けられた。

友達になろう、というと華やかに笑ってくれた。

女の子には笑顔が一番合う。

うん、自分と話すことで明るくなってくれるのは嬉しいものだ。

ある程度時間が経ったので名残惜しいが帰ることにした。

「イルマそろそろ帰るね」
「もう帰っちゃうの？」
「うん、そろそろ時間だし」
「また、会える？」
「うん、必ず会いに来るよ」
「約束よ！待ってるから」

チュッ

と頬にキスされた。

「イ、イルマ!？」
「お、おまじないよ!!約束破ったら承知しないからね!!」
「う、うん!!じゃあまたねイルマ」
「ま、またねロラン」

イルマも顔が真っ赤だけど、俺もたぶん顔真っ赤になってると思う。
う。

その後母上達と合流し、パーティーが終わった。

王城でのパーティーではできるだけイルマに会いに行くこととし
よう、
そう心に決めた俺だった。

次回へ続く

シタリですわ…
)

)
なぜ下着を！？しかもサイズがピ

第七話 パーティーと少女（後書き）

ジエダはこの後、短剣を使い始めたとか…。皆様の想像で補完を…。

文章にするかもしれませんが…。

三つのフラグがありますね。

台詞の少なかつたキャラは難しいですね…。

これは未来のネタの一部です。

本編とは何の関係もございません。

【選手宣誓】

男女「「宣誓！！」」

男「僕たち」

女「わたしたちは」

男「スポーツマンシップにもつこり」

女「なにいつてんのよ！！アンタはあ————！！！！」

この後、女の子は男のテントを蹴り抜くと…、
こんな男女のラブコメデイー。

あ、気にしないで流してくれて結構ですよ。

次話もお楽しみに！！

第八話 悲しみを埋めるもの（前書き）

今回は悩みました。
続きは後書きにて

第八話 悲しみを埋めるもの

〜前回までのあらすじ〜

ども、ロランです。

アルトリア上級小等学校に入学して数か月が経った。

イーリス達公爵家の人達とも仲良くやれてます。たぶん…。

この数か月で公爵家や他の貴族など多くのパーティーに参加した。顔を覚えるのも大変だったけど、祖母に振り回された感が拭えない…。

祖母のせいでジエダと闘うことになったり、下着をプレゼントにしようしたり、実際に送ってないことを祈る。イルマと出会えたことには感謝するけどさ。

イルマとは友達になったけど、

王城でのパーティーでしか会いに行けないので菌痒い気分だ。彼女がアルマ姫のように表に出てこれればもっと会えるのに、とも思う。

後は、マクノイス皇家の二人とも顔を合わせた。

アザラーク皇子はもう少し喋れるようになった方がいいと思う。

ミサ皇女は兄想いで可愛い子だった。

また、会えるといいな。

キャロルのパーティーに参加して以来、

俺が他の女の子と話していると必ずキャロルが怒る。

生まれ変わっても乙女心は理解できない。

もしかして嫉妬とか？

好きな相手に下僕の勧誘はどうかと思うよ。

…別に告白されたわけでもないのに、確定するのはやめておく。

「お前ナマイキだな」

教室で考え事をしてると、玉ねぎ頭の子豚に絡まれた。

確かワール「イジー」だったけか…。

家柄は子爵か男爵だったけ？

興味ないから名前以外うる覚えだ。

公爵家であるジエダにケンカを売ったりする根性は

評価してあげるけど…。

でもジエダに勝てないのに俺にケンカ売られても…。

あ、俺弱いつて思われてる？

「無視してんじゃねえよ！」

子豚君、怒ってます。

「表に出やがれ！！」

…うん、少し遊ぼうか！！

「あ、ロランくんが絡まれたようですよ」

「ケツ、アイツがあんなのに負けるわけねえだろ！！

アイツははずれ俺がぶっ飛ばす」

「やめといたほうがいいぞジエダ」

「そうですわ！私のロランわたくしに勝てるわけありませんわ」

いつからロランくんはキャロルのものになったんでしょ…。

キャロルはどうやらロランくんのが好きなようです。

キャロル自身、自分の気持ちに気づいているかは分かりませんが、ロランくんも気づいていないかもしれないかもしれませんね。

「つるせえ、負けっぱなしでいられるか!?!」

ジエダもロランくんにケンカを売るのをやめればいいのに…。

「というより、相手のイジーの方が心配だな」

それは同感ですね。

あ、二人が出ていきました。

「くられ!?!」

外に出て、いきなりの右ごぶしのストレート。

だが遅い、遅すぎる。爺ちゃんのパンチと比べるまでもない。

ブン、ブン、ブン

ミス!ミス!ミス!

ぶんぶんぶん、蜂が飛ぶ。

懐かしい歌を思い出す。

こんなパンチ何発放たれても当たる気はしない。

…さて、どうしようか?

コマンド

普通に戦う

挽き肉にしてハンバーグ作成

わざと負ける

おちよくる

公開処刑

コイツ相手にわざと負けるとかないわー。

ハンバーグか、腹減ってきた。

当初の予定通り遊ぼうか？

「ちょこまか避けてんじゃねえ」

ブン

だから、当たらないって。

足払い！

ベチャ

「ふげっ」

潰れたカエルのようだ。

よし、足払いだけでいなそう。

僕は躲しただけです、と言いつてもできそうだな。

「うわ、えげつねえな」

「まあ、あれならやりすぎることもないな」

「楽しんでるようにも見えませんね」

「なぜ、さつさと倒してしまわないのかしら？」

「そうですね。ロランくんならすぐ終わるかと思ったのですが」

「遊んでるんだよ、アレは」

数分続いただろうか、ようやく諦めたようだ。

「ち、ちくしょう。覚えてやがれよ！！」

絶対に仕返ししてやっかな！！」

おお、まだ向かってくるとか…。

力の差を理解してほしい。

何度来ても無理だと思うよ。

一遊び終わったので若干すっきりした。

残りの休み時間は、教室に戻ってルカやイービス達と話して過ごした。

次の日。

「おい、ロラン！！昨日はよくもやってくれたな！！」

昨日の今日かよ…。

その根性は尊敬に値するよ。

「メルー兄上！^{あにじいさん}」

こいつがナマイキなんだ！やっちゃってよ！！」

「プリティな弟の言うとおりナマイキそうながきだぜ。弟がずいぶん世話になったよーじゃねえか！」

この玉ねぎ子豚の兄貴はアレだ、

北の拳のヤラレ役に似てる。

シルクの服にトゲつき金の肩パッドをつけてるよ。

日本の学校じゃ考えられない服装だ。

ブンッ、ブンッ、ブンッ

ぶんぶんぶん、蜂が飛ぶ。

だから、当たらないってば。

まだ、魔物モンスターの方がまだよ。

「兄上がんばって！！」

「チッ、当たりさえすればこんなガキ一撃なのに！！」

…当たればねえ。

「ちょこまか避けてんじゃねえぞ!」

ドゴッ

顔面で拳を受けてやった。

「やったぜ、兄上!」

「…痛つて〜!」

だからレベルが違うんだって。
全力で防御するまでもない。
むろん、ダメージはない。

裏拳!!

「ヒデブツ!」

「あ、兄上!」

「おはようございますジエダ。…何を見てるんです?」
「ん」

首で校庭の影を指さすジエダ。

「え、今日もですか?」

イジーくんがお兄さんを連れて来たようですね。

でもまるで相手になっていませんね。

「ていうか、いいざまだぜ」

ああ、ジエダはあのお兄さんに殴られたんでしたっけ。

「あら、今日は攻撃してますのね」

「あ、おはようございますキャラル」

キャラルもロランくんのごことは気になるみたいですね。

「相手が年上だからだろう」

「イージス、おはようございます」

「ああ、おはようルカ」

あ、往復ビンタに移行した。

…ロランくん本当にお強いですね。

「あ、兄上…」

「うぐ、も、もう、ゆ、許してくれ…」

自分達からケンカを売っておいて、
少しむしが良すぎない？
ま、いつか。

「もうこれ以上他の人にも乱暴しないって約束するなら許してあげるよ」

「わ、分かった。約束するぜー!!」

「あっ！兄上！？待ってよう!!」

おお、逃げ足速いな。まだそんな体力あったのか。

手加減しすぎたかな？

まあ、これで絡まれることも無いだろう。

さあ、今日も一日頑張ろう!!

それから数日経ったある日、

なんと俺宛に、マクノイス魔法皇国から手紙が来た。

しかも皇族から。

手紙の送り主は、ミサ皇女だった。

何でもお父さんに頼んで教えてもらったそうだ。

これにより、アルシリアは良質な精霊銀を手に入れることができ

たよつだ。

なんで、手紙一つで外交問題になるんだよ…。

まあ、手紙自体は嬉しかったし、

内容も可愛らしいものだった。

「どんなこと書いてるの〜」

うん、母上に知られた。

「あらあら、ダメよミユーズちゃん」

まあ、一応外交的な文書になるもんね、コレ。

エレンお姉ちゃんが諫める。

「むう、お義母様のケチ〜」

うん、母上超可愛い。

いや、マザコンじゃないからね。

客観的に見ての感想だよ。

とりあえず、こちらからも手紙を書くことにする。

文通だよね、コレ。

ミサ皇女からはアザラーク皇子のことや最近の近況、好きな食べ

物、
趣味などが書かれていて、俺の趣味や好きな食べ物などの質問があった。

とりあえず初めなので、質問の答えや差当りのないことを書くことにした。

それにしても、なぜミサ皇女は俺相手に手紙を送ろうと思ったのだろうか？

真意はよく分からないけど、ミサ皇女と文通するデメリットは何もないので、こちらとしては楽しくやりとりすることにした。

こうして、ミサ皇女と文通が始まることになった。

さらに数日が経ったある日、悲しい出来事が起こった。

キャロルのお父さんがお亡くなりになられた。

突然の急死とのことだった。

現代医学でいう心筋梗塞か脳梗塞あたりだろうか。

「う…っ、う…ぐすっ」

公爵家のご親族の方が亡くなったので多くの人々が葬儀に参列している。

この世界は欧米のタイプの葬儀のようだ。

周りを見渡してみる。

数多くの人が涙を流している。

泣いてはいないが、ルナハイネン卿にも何時もの覇気がない。

娘の前だから泣かないでいるのかもしれない。

俺の母上や父上達もいつにない雰囲気だ。

視線を移すと、キャロルが目に映った。

母親の横で、彼女は泣いていた。

いや、泣くのを我慢しているといった方が正しいのかもしれない。

愛する父親が亡くなったのだ。

悲しいに決まっている。

なにかしてやりたいがかけ言葉すら見つからない。

彼女が求める父親を、
死者を甦よみがえらせることは誰にもできないのだから。

キャロルの目尻に涙がたまっている。

「キャロル……」

「っ……ロラン……！」

キャロルと視線が合った。

同時にキャロルがこちらに走ってきた。

「お父様が……、うっ……」

彼女を受け止める。

そして少しでも彼女の心を楽にしてあげたいと思った。

「泣くのを我慢しなくてもいいよ。

悲しい時は誰だっけ泣いていいんだ」

「っ……、うああああ……！」

キャロルの心の叫びが響き渡った。

俺はただそっとう優しく彼女を抱き締める。

少しでも彼女の悲しみを癒すことができれば……と。

葬儀は荘厳かつ厳粛に、されど数多くの人に見送られ盛大に行われた。

この日、雨が降り止むことはなかった。

数日学校を休んでいたキャラルが登校した。

表情こそ明るくなったが、まだ辛いつらいと思う。

「おはようキャラル」

「ええ、おはようですわロラン」

「えっと、キャラル…」

「ふふ、もう大丈夫ですわ。そんな顔をなさらないで。

いつまでも悲しんでいてはお父様も安心できませんもの…。それに

…」

「おはようございます、キャラル、ロランくん」

キャラルが何かを喋ろうとするとルカが来た。

正直なにを喋ったらいいか分からなかったので助かった。

「おはよう、ルカ」

「…おはようですわ」

「あの、大丈夫ですかキャロル」

「ええ、心配無用ですわ」

「だが、無理はせんようにな」

「キャロルは泣き虫ルカとは違っつてよ」

イージスとジエダも集まる。

「ひどいですよジエダ」

「事実だろうが」

・
・
・

こういった言葉もジエダなりの気遣いなのだろう。

和気あいあいとしばらく喋り、皆がキャロルを気遣う中、
玉ねぎ豚ことワール「イージーが目の前にやって来た。

「あはは、こいつの父ちゃん死んじゃまったんだぜ!!」

こいつは何を言った？

笑って言っている事ではない。

なによりもそれが傷ついた女の子にかける言葉か!!

「おまえ!!」

「ゲフツ」

襟首をつかみ締め上げる。

「謝れ!!キャロルに謝れ!!」

「ぐ、ぐるじい…」

「謝れつつてんだろー!」

おらにきつく締める。

「じ、じべんなぞい…」

「いいか!今度ふざけたこと抜かしたら…」

ドンッ

近くの壁を殴り壊す。

「お前をこっつしてやる」

コクコク

まだ腹の虫が治まらないが解放してやる。

「二度目は許さない。覚えておけ」

そう言い俺は皆にどういう顔をしていいのか分からないのと気持ちを落ち着けるため教室を出て外に向かった。

「すごい怒気でしたね、ロランくん」

進むマナがはつきり目に見えるくらい凄まじいものでした。

「ああ、だがどうみても奴が悪い」

「そうですね」

「ロランが怒らねば私がやっていた」

イージスも今のは許せないようですね。
怒るイージス、久しぶりに見ましたね。

「キャロルもイジーの言ったことは気にするなよ」

「……………」

「キャロル？」

…反応がありませんね。

やはり今の言葉に傷ついたのでしょうか？
いえ、これは違いますね。顔が真っ赤です。
もしかすると…。

「ところでロランくんはどちらに行ったのでしょうか？」

話題を変えてみました。

「外に行きやがったな」

「そのようだな」

「あ、キャロル…！」

キャロルが教室を駆け出してきました。

おそらく、ロランくんを探しに。

キャロルSide

お父様が亡くなり私はとても悲しかった…。

お母様も悲しいはず、

そう思いお母様を見ました。

けれども、お母様はお泣きになどなりませんでした。

私はそのことが悲しくてまた泣きましたわ。

でも違いましたの。

夜、お父様の部屋に行くとお母様がいましたわ。

お母様は泣いていましたわ。

お母様はお一人の時にお泣きになっていたんですのね。

人前でお泣きにならなかったのは、
私を不安にさせないためでしょうか？

私もお母様を見習おうと思い、
葬儀の時は泣くのをできるだけ我慢しようと思いました。

悲しいのを我慢して、数多くの人達が見守る中、
お父様の葬儀は執り行われましたわ。

でも、ロランに会って彼の顔を見ると
私は彼に抱きついてしまいましたの。

そして、彼の言葉を聞いて私は我慢をやめましたわ。
優しく抱き締められて、優しい言葉をかけられ、
大泣きいたしました。

その日は涙が枯れるまで彼の腕の中で泣きましたわ。

不思議と心が軽くなりましたわ。

お父様の事はとても悲しい、

けれどもいつまでも悲しい顔をしてはお父様が安心できませんわ。
んわ。

そう思えるようになり、前を向くことができましたの。

ふと、彼の顔が浮かんだ。

無性に彼に会いたくなりました。

明日から学校に行くことにいたしましたしょう。

次の日、彼に会うことができました。

彼は心配そうな顔でこちらを見つめましたわ。

^{わたくし}私は彼に大丈夫であることを告げ、

次の言葉を言おうとしました。

この時何を言おうとしたのか自分でもわかっていませんでした。

でもそれはルカ達によって遮られましたわ。

それで良かったのかもしれない。

談笑していた時にそれは起こりましたわ。

ワールハイジーがお父様の事を侮辱いたしました。

とても許せる気分ではありませんでした。

でも、^{わたくし}私が怒るよりも早く彼が怒ってくれました。

彼を見る。

鼓動が早い。

私わたくしのために怒ってくれたことが嬉しい。

胸が激しく高鳴る。

その時私わたくしは自分の気持ちにようやく気づきました。

なぜ彼を欲しがったのか、

なぜ彼が他の女と一緒にいるのを見るとイライラするのか、

なぜ彼に抱きついたのか、

なぜ彼を見るだけで胸がこんなに高鳴るのか、

全て理解いたしました。

私わたくしはずっと彼に恋していたのですね。

いえ、もう恋という気持ちではありませんわね。

私わたくしは彼を愛しているのですわ。

そう理解するともう止まらなくなりました。

彼を追いかけるため、すでに私わたくしの体は動いていましたわ、

彼にこの想いを伝えるために。

お父様、私に愛すべきお方が見つかりましたわ。

お父様、安心して天国から私の事を見守っていてくださいましね。

Side out

次回へ続く

ふむふむ、次回はどうなるのかのう。

第八話 悲しみを埋めるもの（後書き）

原作にキャラクターと父親が踊っている絵が二コマあるんですよね。キャラクターの大きさと、父親を早くに亡くしたことで、

それらを踏まえて今回のお話となりました。

原作までまだ遠いですね。

ハーレムのタグ、ぼちぼち入れた方がいいですかね？

毎度ながら更新が遅く申し訳ありません。

でも諦めず完結まで頑張りますので、

どうかこれからも宜しくお願いいたします。

第九話 告白と変化していくもの(前書き)

今回読みにくかったら申し訳ないです。
だいたいの口調でお察し下さい。

第九話 告白と変化していくもの

～前回までのあらすじ～

毎度おなじみロランです。

前の世界でいう小学校に入学し数か月経ち、多数のパーティーに参加したんだ。

そこで、双子の王女と出会ったり、他国の皇族とも知り合いになった。

同級生に絡まれたり、その兄貴にも絡まれたり、撃退したけど。マクノイス皇家のミサ皇女と文通が始まったり、そこそこ楽しく人生過ごせてます。

けど、人生には悲しい出来事も起こるわけで…。

キャロルの父親、つまり六大公爵家の方がお亡くなりになられた。泣いたキャロルは初めて見た…。女の子の涙はあまり見たくないよね。

女の子は笑顔でないと。

キャロルが久しぶりに学校に来た日、豚が言うてはならないことを言ったのが、

我慢ならなかったので締め上げて、謝らせた。

怒った後どんな顔をして会話していいのか分からなかったの、まだ落ち着かない心を鎮めるため、外に出たんだ。

うん、気まずいね。

教室は出ちゃったし、すぐ戻るのもどうかと思う。

時間ぎりぎりまでぶらぶらしようかな？

中庭で時間を潰すのもいいな。

とりあえず歩きながら考えよう。

あれだね、豚君へのむかつきは今度の休みに

オーク狩りでもして晴らそうか。

エレメンタル・ブレイズ 精霊剣双奥義ならぬ エレメンタル・パレット 精霊球双奥義の実験もしたいし。

うん、そうしよう。

エレメンタル・ブレイズ
精霊剣双奥義

エレメンタル・セイバー
二人で同時に精霊剣を放ち、精霊剣を同調させ

個々で放つよりも強力な技へ昇華させる奥義。

【一例】風の精霊剣トルネードセイバーと炎の精霊剣フレイムセイバーとは

イグニスフロウと呼ばれ、風の軌道に炎を乗せ巨大な焰の鳥が敵を襲う技となる。

なお、必ず鳥という訳ではなく技を使う人間により形状は変化することがある。

焰の鳥は鷲ワシや鷹タカが一般的。

エレメンタル・バレット
精霊球双奥義

ロランが試作中の未完成の技。どんな技かは不明。元となる技はヘンリー（祖父）が教えたと思われる。

中庭に到着した。

吹き抜ける風が気持ちいい。

このままさぼって一眠りしたくなる。

楽になると木にもたれかかる。

と同時に足音が近づいてくる。

「ロ、ロランッー!!」

キャロルが走ってやって来た。

息切れしてる。

息切れしてまで、俺を探してたようだ。

…勝手に怒ったのが拙ちがかったのかな？

そのことで怒ってるとか？

とりあえず謝ろう。

元日本人的な思考でそう考える。

ドンッ

キャロルが体当たりのようにして俺に抱きつく。

「キャ、キャロル！？その、ゴ…」

ゴメンと続けようとすることは敵わなかった。

なぜなら俺の口は彼女の唇によって塞がれたのだから。

どのくらいの時間が流れただろうか？

数時間のようにも感じられたが、
実際には数分もしくはそれ以下かもしれない。

お互い顔は真っ赤である。

口と口なので、イルマからのキス以上に衝撃的だ。

ファーストキスだよね、コレ。

ちなみに赤ちゃん時代の母上はノーカウントだ。

突然のことに頭がいっぱいになり身動きできない。

ロランは状態異常、石化、混乱を受けた！！

ようやくキャロルが名残惜しそうに口を放した。

と、とりあえず…どうしよう!？

ロランは混乱している…!!

「ロラン…」

ん？

両手で顔が固定されたよ？

え…？

ま、まさか!?

顔が近づく。

チュツ

もう一度!?

再び口が塞がれた。

…うん、キャロルの唇柔らかくて気持ちいい。

それにとってもいい匂いがする。

はっ!!!

正気に戻れ俺!

本能に負けてはいけない。

…舌入れたら怒られるかな?

ロランはますます混乱している。

うん、これは夢だ!!!

そうに違いない!

ならば…!!!

舌を入れようとする寸前で顔が放される。

ぎ、残念なんて思っていないんだから勘違いしないでよね。

ツンデレ風に自分に突っ込んだが気持ち悪かった。

唇は解放されたが依然ゼロ距離、くっついたままである。

なにか話さないと、と考えていると、

すう、と深呼吸し幾分か落ち着いたキャロルが話す。

「ロラン、私はあなたわたくしの事が好きなのです!!

誰よりもあなたを愛していますわ!!」

…聞き間違いや嘘でもなさそうだ。

顔も真っ赤で鼓動も速いし、なにより目が真剣だった。

「キャロルが…俺を？本当に？」

確認のためもう一度聞く。

「そうですね。私わたくし、もうあなた以外を愛することはできませんわ」

顔を真っ赤にして、潤んだ瞳で、はっきりと想いを伝えられる。

可愛い。

何だこの生き物は。

こんな性格だっけ？

ツンデレじゃなくデレデレじゃない、コレ？

…だがそれがいい！！

いやいやそれどころじゃなかった。

余計な考えを押し付け考える。

六大公爵家のご息女から愛の告白を受けたわけだ。

先程の告白を要約すると、

返事を聞かせてというより責任を取れ…ということでは？

「だ、だけどキャロルは公爵家のご息女だし、俺も侯爵家の嫡男だし…」

「承知していますわ。

でもそれは二人の間に子供をたくさん作って後を継がせればいいだけですよ」

話が飛躍した！！

子供、子供か…。

子供を作るといふことはそういうことをするわけで…。

…落ち着け俺、深呼吸して考えろ、

自分の人生がこの年齢で決まってしまうかもしれないんだぞ。

こういふ問題は先延ばしするに限る。

「お、お互いまだ子供だし、子供だけで決めていい話でもないし、
なによりお互いの事よく知らないでしょ？」

「ええ、ですからこれから私の事をわたくしいっぱい知ってくださいましね？
私もあなたにふさわしい、あなた好みの女性になって見せますわ。
もちろん周りは説得して見せますわよ？」

俺の言い逃れ？は一蹴された。

てか可愛い。華が咲いたような笑顔で言われてしまった。

自分好みになってくれる？キャロルが？

「それは嬉しいな」

…しまった！！声に出してしまった。

「私も嬉しいですわ、これからよろしくお願いいたしますわね？」

上目遣いは効果抜群だ！！

ロランは力尽きた…。

「ああ、うん。と、とりあえずそろそろ時間だから…も、戻ろうか
？」

「ええ、そうですね」

ま、先のことを考えても仕方ない、なんとかなるだろう。

自由や楽しみが無くなるわけでもない。

今を楽しむことも大事だ。

キャロルのことも嫌いじゃないし、
むしろ今は物凄く意識してるしね。

キャロルに腕を組まれ寄り添いながら教室に向かった…気がする。

吹き抜ける風が火照った体に対して気持ち良かった…と思う。

六大公爵家 Side

ガラガラ

扉が開けられ外に出ていた二人が戻って来た。

「あ、戻って来ました…ね」

「はあ!?!」

「ほづ…」

ロランさんとキャロルが寄り添って腕組みして戻って来ました。

どつという結果こうなったのか詳しく聞きたいですが、

先生も来てしまいましたね。残念です。

後で聞いてみましょうか。

・
・
・

「そうでしたか、おめでとつございますキャロル、ロランくん」

「ありがとうございますわ、ルカ」

放課後の帰るまでの間、従者を待たせて二人にお話を聞いたところ、

全部話してくれました、主にキャロルが。

ロランくんは全て話され恥ずかしいのでしょうか、

一言も発していませんね。

でも、嫌じゃなさそうです。

今もお二人くっついていますし…。

「ところでよう、お前の好みの女のタイプはどうなんだよ？」

周囲に残っている女どもまで一斉に耳を立てやがる。

チツ、むかつく野郎だ。

こいつのどこがいいんだ、女どもは。

…なんかこいつ、上の空じゃねえか？

「…あ、俺の？」

「そうだな、その話の流れでは重要ではないのか？」

「確かに聞いてみたいですね」

「わ、私も聞きたいですわ！！」

あのキャラルがこうなるとはな…。

私の想像わたし以上だな。

ロランの好みによってはあの性格が改善されるのではないかと期待する。

「好みか…、強いて言うならスタイルが良くて、美人で、気立てが良くて、

優しく、俺の全てを許してくれる人？みたいな感じかな」

「「「「「……」」」」」

まずいですわね。

私わたくしの気持ちは本物ですが、

今の私の性格ではお気に召してくれず、捨てられてしまっかもしれない。

それだけは、絶対に避けなくてはいけませんわ!!

今すぐは無理でも、必ず彼の理想の女性になって見せますわ!!

「男にとって都合のいい女が好きなのだな」

「ジエ、ジエダ…」

「ふむ、なるほどな…」

「都合のいい女…（が、がんばりますわ!）」

「そう言われるとなんか俺が悪人みたいだ…」

ケツ、こいつも案外いうじゃねえか。

…コイツまた、上の空になりやがった。

…つーかキャラルの反応もおもしろえ。

せつかくだ、少しからかってやるか。

「キャラルとは全然違う理想だぜ」

「そ、そんなことはありませんわ!

スタイルは今でも自信がありますが、これからもっと成長しますわ。性格の方も努力いたしますわ!!」

「無理じゃねえの?」

「五月蠅いですわよジエダ!!」

「そうですよ。」

そんなこと言っではいけませんよ、ジエダ」

「そうだな。まあ、二人が幸せならそれでいい」

「ああ、うん、ありがとう…」

不幸があつた後だ。幸せであるのはいいことだろう。

なんにせよ、このまま上手くいけば、キャロルもいい風が変わっていくに違いない。

…都合のいい女はどうかと思うが。

「がんばってくださいねキャロル」

「ええ、必ずあなた好みの女性になりますわロラン」

「う、うん頑張つてね」

これからはあの勧誘もなくなりそうで助かります。

しかし、キャロルは必死にロランくんに入られようとしてますね…。

確かに今ロランくんが言ったことは、

キャロルに当てはまりませんでしたものね。

「ケツ、まあ頑張るこつた」

案外つまんねえな。

他人の幸せなんて正直どうでもいいぜ。

俺様も…。

それぞれの反応であった。

） Side out ）

． ． ．

「おかえりなさい。…ロランちゃん？」

はっ！！！

いつの間に俺は家に着いたんだ！？

数時間記憶がないぞ！！

ロランはようやく正気に戻った！！！！！！

「…ロランちゃんから女の子の匂いがする〜！！！！」

キャロルの匂いだろうか…。

母上もよく分かるね…。

犬ですか、あなたは。

「ほう、ロランに彼女でもできたかの？」

「お母様〜冗談はやめてくださいね〜」

「どこの令嬢じゃ？」

「誰なの〜！？」

「に、匂いがたまたまついただけじゃない？」

…とりあえず、誤魔化しておくことにしよう。

祖母がいるのでこれ以上話をややこしくしたくない。

うん、ばれるまで黙ろう。

沈黙は金なり、ってね。

次回へ続く

） ロランちゃん、彼女なんて言わないわよね。

あはは、なんのことでしょうか？僕分かりません。

誰じゃ言ってみんかのう？ほれ言ってみい。……。

黒じゃのう。ロランちゃん！？ロランは逃げ出した！！！！

！
）

第九話 告白と変化していくもの（後書き）

雄弁は銀なりですけどね。

前回といい口から砂糖が出そうです。

もつと甘い方が好みですか？

…まあ、出来なくはないです。

二人目は2〜3話かけようかな？

…その時に考えますね。

次回もがんばります。

第十話 女王即位十周年にて（前書き）

しかし、ロランはまわりこまれた！！

第十話 女王即位十周年にて

〜前回までのあらすじ〜

ロ、ロランです。

久しぶりに学校に来たキャロルと皆で話をしていた時に一悶着あった後、

外に出た俺。すると、キャロルが俺を追いかけてきた。

怒ったのかと思いきや、突然のキス。

ごちそうさま!!!と本来なら言いたいけど、

不意打ちに弱いのかね？頭の中は大混乱。

さらにキス、愛の告白を受け、結局流されちゃった…。

嫌いじゃないからいいんだけどね。

六大公爵家キャロルご令嬢とお付き合いですることとなりました。

あれからだいたい三年が経った。

現在の俺は…、ん？

えっ？

飛ばすなって？

この間の続きが知りたいと？

…

……

……

………順調だよ。

何から話そうか…。

まず母上や祖母達には…、

その日にはれてしまった。

母上と祖母ミリーねえちゃんの追及から逃れられなかった。

だけど、誰と付き合ってるかまでは教えずに済んだ。
だからまだ完璧に把握されてはいないだろう。

でも、いまだに母上は誰か調べたがるし、

(実際執事に尾行されることが多い)

祖母は婚約にもっていきこうとし、母上はそうはさせまいとする。母上は俺が誰かと付き合うのはまだ反対のようだ。

まだまだ注意が必要である。

ばれた次の日、キャロルはまだルナハイネン卿には話をしていなかったなので、

ある程度二人が大きくなるまでは内緒にしてもらおうことにした。親は知り合いみたいだしね。用心は大切だ。まだ、この歳で婚約はないだろう。

キャロルとの付き合い自体は順調だ。

今では、キャロルのことが好きだと断言できる。

そりゃ、意識するくらい可愛い女の子にずっとくっつくかれて愛を囁かれれば、その気にもなりますって。

付き合いをする上で、一番気を使うのはデートかな？

まず、密偵（両家執事達）を撒くことから始まるんだよ。

それに結構時間がかかるんだよね…。

何人いるんだ、見失ったら諦めるよ、って心底思った。

もちろんパーティーなどでは、あまりイチャつけない。

少しキャロルは不満そうだが埋め合わせをしているので問題はない。

ん？

どこまでいったって？

俺達まだ九才だよ！！

したくてもできない。

キスは何回もしたけどね。

今こそ言おう、

ごちそうさま！！！！

キャロルも努力してくれてるみたいで、
だんだん性格が丸くなってきてる。

それに、お胸が大きくなりだした。

まあ、まだ微々たるものだけど。

将来が楽しみだ。

うん、楽しみで仕方ない！！！！

次にミサ皇女との文通について。

こちらはまだ続いている。

手紙に俺の好きな女性のタイプなどが書かれることがあり、
パーティーで出会うとアザラーク皇子と一緒によく話す。
少し赤い顔で…。

これって俺の事が好きなのだろうか？

いやいや、相手は一国の姫君、早とちりはダメだ。

もしそうなら嬉しいけどね。

…これは浮気か？

いや、手を出したわけでもないし、ミサ皇女が俺に惚れたとして、結果的に一国の姫を嫁にもらうことになれば、

側室も認められる可能性は高い。貴族って妾も多いしね。

断じて浮気ではない。この思いは未来への投資だ。

まあ、つまりハーレムはどこの世界でも男の夢だということだ。

夢は諦めてはいけない、追いかけて叶えるものだ！

うん、名言だ。

ま、とりあえずキャロルには文通の事は話していない。

一応外交的な交渉から始まったことだしね。

とりあえずは現状維持ってところだ。

次にイルマ。

会える回数は限られるけど、会えるときは必ず会うようにしている。

ひとつ気になることがある。

イルマに会うとたまに邪悪なマナを感じるがあった。
イルマが話すには、六大公爵家レヴァンデイン卿が処方したお薬を
飲んでいるとのこと。

…薬がイルマに必要なのだろうか？

心や精神に問題があるならむしろそんなものより
他人とのふれあいの方が大切だろう。

もし…、もしもだ、その薬が邪悪なマナを増幅し心や精神を壊す
類のモノだったら…。

例え六大公爵家だろうが許さない！！

しかし、レヴァンデイン卿の顔を俺は知らない。
それにその薬自体を調べないと確証にならない。

それができる可能性は極めて低い。

まず、目の前で薬を飲むのを確認させているだろう。

なので、別の手を打つことにした。

光のマナを俺の体に溜め、

イルマと会った時に聖なるマナに変えて少しずつ浄化することにし
た。

邪悪なマナを体になじませないように。

器と同じだ。汚れがこびり付くと洗っても取れにくい。
常にきれいな状態ならこびり付かせるには時間がかかる。

とはいえ、イルマとは常に会えるわけではない。

もっと、頻繁に会えればいいんだけど…。

とりあえずできることをしつつ、情報を集めたりしてる。

イルマは俺と会えるのをすごく楽しみにしてくれてるようすで、こちらとしてもすごく嬉しい。

うん、この子もすごく可愛いわ。

もし、ハーレムが作れるのならものにしたいね。

そのためにも、俺を好きになってもらわないとダメだけど。すでに、惚れてくれていないかな…。

おっと、思考がハーレムを作ることを前提にしてる、気をつけねば。

ちなみに、イルマもお胸が大きくなりだした。

キャロルと同じくこちらもまだ微々たるものだけど。

双子といえどもアルマ姫に成長の兆しはない。

二卵性の双子だろうか？

…がんばれアルマ姫。他国の王子達にはモテているぞ！

というか俺、あんまりアルマ姫とは話していないな。

だいたい王城ではイルマと会ったり、キャロルやイージス達と話したり、

アザラーク皇子やミサ皇女が来ている時はそっちと話したりアザラーク皇子の後押しをしたりしてるもんな、俺。

…別に問題ないかな？あつたらその時考えよう、うん。

修行の方は、現在九歳になってさらに強くなったと思う。

アラン爺ちゃんにも素手の勝負で勝率五割前後くらいだ。

この頃の修行は組手が多い。そのうち二対一とか三対一にするそう
だ。

この鬼どもめ…。あんただよ、このロリ洗濯板ババア！

あ、聞こえたの？や、やだなあ、冗談ですよ…。いいやあ～～～！！

（しばらくお待ちください…）

・
・
・

…こ、今回の教訓だ。

口は災いの元。これ結構大事です。

何があつたかは聞かないで…。

話を戻して、体も前よりは大きくなったが、まだまだだね。

あと四～五年くらい経てば満足できるだろうと思っけど。
待ち遠しいね。

他には、特に大きな変化はないかな。

近況としてはこんなところだ。

今年はアルテリーナ女王陛下の即位十周年だ。

そのため、王城で他国の王族を招いたパーティーや各地でパレードを行うことになっている。平和だ、平和なのはいいことだ。

現在そのパーティーが開かれている。

いつも通りイルマに会い、その後パーティーに戻ることにする。

・
・
・

今回も無事誰にも見つからず戻って来れた。

イルマって普通にいい子だと思うんだけどね。

何とかしてやりたいね。

少しでも会う機会を増やして助けになればと思う。
クインナイト
女王騎士になればもう少し会う機会も増えるかな？
うん、がんばろう。

(さて、誰か知り合いは…と)

「アザラーク皇子にミサ皇女、お久しぶりです」

「ロ、ロラン様…!」

「あ…ロラン…ん、う…!」

アザラーク皇子の視線の先にはアルマ姫に群がる他国の王子様方。

「あゝ、今回はすでに群がってますね。あれじゃあ迷惑か。今回は挨拶だけにした方が印象もいいかと思えますよ」

「あ…！うう…」

「（ロラン様また一段と素敵になりました）」

お兄様頑張ってください、ロラン様今日もお願いいたします」

「お安いご用ですミサ皇女、ではアザラーク皇子」

アザラーク皇子を引つ張りアルマ姫の前に連れていき、そして軽く挨拶しミサ皇女のところへ戻る。

アザラーク皇子としては他の王子達と同じくもう少しあの場にいたいようだが…。

「う…、あ…！」

「いいんですよ、あのまま話しても彼らと変わりありません。がつかつしない方が今回は正解です。」

もともと彼女の母親、女王陛下のパーティーなんですから」

「いつもありがとうございます。ロラン様」

「いえ、ミサ皇女そのドレス、とてもお似合いですよ」

「あ、ありがとうございます…（褒められた！嬉しい！）」

その後、しばらく話をした後二人と別れた。

「あら、ロラン…！」

「キャロル！」

セーフー!!

修羅場にはならず済んだ。

あと、少し話していたらまずかつたかもしれない。

キャロルがこちらにやって来た。

「（今の方…）ロラン、

…いえ、なんでもありませんわ（お母様に相談いたした方がいいのかしら…）。

それよりも…どう、ですか？」

少し頬を染めて一回転し、赤いドレスを強調して見せる。

大きく肩を見せ、スカートは短すぎず長すぎず絶妙。

胸元の刺繍も華やかで、全体としてどこことなく品のいいエロさまである。

実にいい。

「キャロルそのドレスとても似合ってるよ」

「ありがとうございますわ。あなたに見てもらいたくて選んだ甲斐がありましたわ」

その後、しばらく談笑しつつものパーティーのごとく過ごした。

こうして、王城でのパーティーを終えた。

数日後のパレードにて事件が起こった。

ある町にてパレードを行う際中、他国の暗殺者が反王国主義の刺客か、

賊共がヤパーナの忍者（インジャファイター）に変装して陛下の命を狙い襲撃する事件が起こった。

周囲にいた女王騎士（クイーンナイト）たちがこれを即座に撃破し、女王陛下に被害は全くなかった。

もちろんヤパーナ国も即座に事件の関与を否定し、友好関係回復に努めることとなった。

というか、アルシリア側もこれには同意している。なぜかという点、隠密や暗殺を得意とする忍者があんな堂々と人前で行動を起こすわけがないからだ。それに、女王を襲う任務を受けるほどの忍者ならば多少なりとも女王騎士に被害が出るはずだが、今回の賊共は無傷で一撃で倒されている。

女王騎士が各国と比べて最強の騎士といわれるにしてもいくらなんでも弱すぎるということだ。

事件が起こったため、女王陛下のパレードが短縮にするか、変わらず行つか王宮内で揉めたそうだ。
結果として、警備を増強して変わらず行うことで落ち着いたみたいだ。

結局、真犯人が誰か分からなかったのが俺としては気になった。
賊たちは口を割らず自害したそうだ…。
事件の真相は闇の中のようなのだ。
まあ、分からないのだから仕方ない。
個人的には、平和が一番なんだけどね。

次回へ続く

） お母様相談がありますの ）

第十話 女王即位十周年にて（後書き）

参考までにキャロルのドレスはデザイナー、

DIIザイン氏が手掛けたものです。珠玉の一品とか。

七巻と九巻では忍者と侍ニンジャファミサザキナイトの表記が違ってますよね。

九巻は忍者ファイターと侍ナイトになってますね。
ルビが面倒になったのかもしれませんがね。

あくまで予定なのですがあと七から十話くらいで
原作突入になると思います。幅が広いですね。

あくまで予定です。予定は未定よくいわれます。

第十一話 一緒にいるために(前書き)

さくさく進めたい…。

第十一話 一緒にいるために

～ 前回までのあらすじ ～

ロランです。

前回で九歳になりました。

さくさく成長中です。

今年アルテリーナ女王陛下が即位して十年目だ。

そのためパーティーやパレードを行う。

その女王即位十周年記念パレードにて事件が起こったようだ。

女王陛下は無傷だから良かったものの、忍者に扮した賊の正体は分からなかったようだ。

キャロルSide

お母様が家のご帰宅なさり、今私目わたくしの前まへにいます。

私は愛わたくしする人ロランとずっと一緒にいたい。

だれにも彼を渡したくない。

たとえ大国の皇族であったとしても…。

先日のパーティーでロランがマクノイス魔法皇国の皇女とお親しそうにしていっちゃた。

胸が締め付けられました。

もっと強い絆が彼との間に欲しいと思いましたわ。

絶対に負けられませんわ！

彼と結婚するのは私わたくしですわ！！

そのためにもお母様に認めていただき、協力していただかねば！！

お母様に相談したいことがあるといい、お話をすることにいたしました。

「で、相談というのは？」

気を引き締めお話を切り出すことにいたします。

「お母様、まずはお話がありますわ」

「なにかしら？」

「私わたくし、好きな殿方ができましたわ。

すでに数年間お付き合いしていますの」

「ええ、報告は受けています。ようやく私わたしに話してくれましたね。

で、その相手は誰です？さすがにどこその馬の骨ではないのでしよう？」

一定の基準以下の男性は認めてくれないということでしょう。でも、ロランは侯爵家だから問題ありませんわね。

「ロラ…、侯爵家の嫡男ローランド・アウスバッハという方ですわ」

お母様が名前を言った瞬間頭を抱えました。一体なんなんでしょうか？

「そ、その子の年齢は？」

「私と同じ年ですわ」

「はあ、…一筋縄ではいきそうにありませんね。

…キャラル本当にその子が好きなのですね？」

「ロラン以外の方は考えられませんわ！！

他の方に渡したくありませんわ」

心の赴くままに、お母様に私の思いをぶつける。しかし、なぜ溜め息をつくのでしょうか？

「ならばよろしい。話を進めましょうか、それで相談というのは？」

「いよいよ本題ですわね。

「彼とこのことを認めてくださいまし。彼と婚約させてほしいのですわ！-！」

言った。

あとはお母様に認めていただくだけですわ。

「それほどまでに好きな相手がいるのであればお見合いさせる手間が省けましたが、その相手と婚約するのは難しいともいえます」「ど、どうしてですか!!」

お母様の言葉に思わず声を荒げる。

ロラン以外との男性とお見合いなんて絶対いやですわ!!

「落ち着きなさい。誰も反対はしていません。難しいと言ったのですよ」

「…何が難しいのですかお母様」

「彼の母親です」

「そのどこが問題なのですかお母様」

訳が分かりませんわ。

「彼女は私の知り合いなのですが、彼女は息子を溺愛ぶりを考えると婚約に簡単に首を振るとは思えません」

お母様が頭を抱えたり、溜め息をついたのはそのためなのでしょうか？

しかしそれでは納得いきませんわ!

「ではどうすればいいのですかお母様。

私は彼以外は嫌ですわ!! 他の方とお見合いもお断りいたします

わ!」

「分かっていきますよ。あなたは私に似てますもの…。
そうですね…。時間はかかりますが…」

・
・
・

…なるほどですがお母様ですわ。

すぐに婚約とはいきませんがお母様の協力は得られましたわ!

あとは時間の問題とお母様の頑張り次第ですわね。

その時が来るのが待ち遠しいですわ。

それまでに私ももっとあなたにふさわしい女性になって見せますわ!
わ!

あなたと一緒にいるために…

） Side out ）

さらに三年が経ち十二歳になった。

来年には通いなれたこの学校も卒業である。

同級生の多くは貴族騎士学校ナイトアカデミーに進学するようだ。

貴族騎士学校というのは騎士や女王騎士を目指す上流階級の子供達が通う学校のこと、厳しい修練を終え卒業を認められた一握りの優秀な者だけに名誉の証として特別なマントを与える風習がある。

俺は進学したところで教わるのが少ないので、どうしようか考え中だった。

進学は別に義務ではないし、マントにも興味ないしね。いっそのこと他国に留学や旅するのもいいかと思う。

そんなことを考える中、父上が発言した一言によって学校に行くか行かない以上の人生の進路が差し迫った。

「ロラン、お前に許嫁ができた」

「はい!？」

「だから、お前に許嫁ができたと言ったのだ」

「い、許嫁!？俺に? いったい何でまた? 誰と?」

「六大公爵家ルナハイネンのご息女がお前の許嫁になる。」

理由はだな…」

相手はキャロルか、付き合ってるし別にそれはいいんだけど…、急に話が浮上したな。ていうか、母上が納得するのかな？ たぶん、しないと思うんだけど…。

「あ〜な〜た〜」

突如、父上に鞭が巻きついた！！

おそろおそろ、目を鞭の元へと辿たどらせる。

ゴシゴシ

目を擦こすってみても見間違いではないようだ。

鞭を振るったのは我が愛しの母上様であった。

案の定納得していない顔をしていらっしやる。

「何でそんなことになってるのかしら〜」

「い、いや、そのだな…」

・
・
・

父上、鞭で身動きが取れないまま説明中。

父上の話を要約すると三年ほど前から父上の手腕を見込んで

ルナハイネン家から領地経営のアドバイスをしてほしいと頼まれた
そうだ。

それにより、ルナハイネン卿つまりキャロルの母親である
スカーレット將軍と会食する機会も増えたのだとか。

ある時、俺が誰かと付き合っている噂と

キャロルが誰かと付き合っている噂があると話に上がったとか。
さらに酒の席にて、自分達の可愛い子供達をそこら辺の
やつにあげるわけにはいきませんと、將軍と意気投合したそうなの。

ならば、お互いの子供を許嫁にしましょうという話になったそう
だ。

最初は断った父上だが、スカーレット將軍の熱意ある
頼み込みに断りきれなかったのが今回の結果らしい。

「…やられたわ。 ロランちゃん」

「な、何？」

「ロランちゃんの付き合ってる子って、
ルナハイネンの娘でしょう？」

……ばれた。

まあしょうがない、正直に話すか。

「えと、その通りです母上」

「なんとそうであつたか！！」

いやあ、だったら全く問題ないではないか、などと続ける。

あ、母上に青筋が…。

「あなた、あつちへ行きますようか？」

「何をするつもりだ？」

「調教おしおき」

「ま、待て、話せばわかる！！あ~~~~！！！！」

・
・
・

母上にばれたということはキャロルの母親にも
ばれてると考えた方がいいかな。

父上が折檻されている間に考える。

そもそも六大公爵家が他の貴族にそんなことを頼むのだろうか？
もしかすると初めからこれが目的だったとか？

とすると、キャロルの母親は協力的なポジションであることから
キャロルが付き合っていることを話してそれを認めたのだろう。

それで、父上が許嫁として正式に約束をした、と。

実質、婚約なのか…コレ？

次の日、祖父達も集まって家族会議が開かれた。

まず、父上から一連の話を行った。

母上は相変わらず不機嫌そうだ。

「して、どういう条件の許嫁だ？」

「私達の時とそう違いはありませんよ義父上」

「それでは少し困るのでは？」

「ええ、ですのでお互いの立場は平等に、二人の間に子を必ず複数設けること、

あくまで許嫁なのでお互いに愛がなければ破談などといった条件はあります」

話から察するに、むこうもこちらに譲歩しているようだ。

「だが、二人は付き合っておるといふことじゃな」

「実質、婚約のようなものだな」

「……………」

母上の無言が怖いです。

「ロランはその子のこと愛しているかのう？」

答えにくい質問を……………。

「…愛してるよ」

「うむ、良いのではないかの？」

羞恥プレイか、家族の前でこんなことを言わせるなんて……………。

「む、決めた！直接会いましょうか」

会ってキャロルと？

「会ってどうするのミューズちゃん？」

エリンおねえちゃん
祖母も疑問に思ったようだ。

「その子がロランちゃんにふさわしいか見てあげます」

「しかし、公爵家と約束してしまったものは変えられないぞ!？」

母上の言葉を聞いた父上が焦る。

「関係ないわ」

関係ないって、母上…。

「ほどほどにな」

「あらあら」

「顔を合わせるのはどのみち必要だな」

「楽しそうじゃの、わらわも…」

「勘弁してください…」

あれよあれよと、その方向で話がまとめられていき、

次の週末、俺と母上と父上がルナハイネン邸へ行くことが決定された。

ていうか、誰か一人くらい止めてくれよ…。

週末になった。

馬車でルナハイネン邸に着き、応接間に通された。

いまから、どんな話になるのか正直不安でいっぱいである。

「お待ちせしました」

キャロルと母親のスカレット將軍が入ってきた。

「いえ、突然の訪問に応じていただき感謝いたします」

「構いませんよ、ミューズも久しぶりね」

「そうね」

父上達と將軍が挨拶をする。

母上の視線はキャロルに固定だったけど。

「この子がキャロルと付き合っている子ですね」

「お初にお目にかかります、キャロルさんとお付き合いさせていた
だいています」

ローランド「アウスバツハです。挨拶が遅れて申し訳ありません」

緊張するね。

あれだ、娘さんを僕にください！！

みたいな感じに近いなこれ。

「いえ、構いませんよ。楽にして結構よ、将来的に息子になるので
すから」

「認めたわけじゃないわ」

「六大公爵家と正式に結んだ約束よ、違えてもらうのは困るわミユ
ーズ」

「そもそも、許嫁だからといって結婚するわけではないわ」

「あら、二人は好きあっているのよ、自然な流れじゃない」

「やり方が納得できないわ」

…母上が將軍と口論を始めたよ。

父上止める努力をしようよ…。

キヤロルと目が合う。

うん、可愛い笑顔だ。

しばらくして口論も収まってきた。

「む、条件を付け加えます」

「条件？」

「どんな条件だ？だいたいは以前決まっているのだぞ」

「えっとね」

母上の話をまとめると

1・女王騎士に双方がなること

- 2 ・俺の理想像の女性であること
- 3 ・双方に確かな愛があること
- 4 ・花嫁修業すること（週一通いで母上の元で修行）
- 5 ・双方は家柄に関係なく対等な立場であること
- 6 ・1～5を満たし、婚約・結婚した場合子供は3人以上作ること
- 7 ・妾ができた場合はこれを認めその子供も含め家族とすること

「ちょっと待ちなさい、最後の条件は何ですか」

そりゃそうだよな、物凄く俺に都合がいいぞコレ。

娘を持つ親なら反対するのは当然だわ。

「その子一人だとロランちゃんが可哀そうで」

「どれだけ親馬鹿ですかあなたは！

さすがに認めるわけにはいきません！！」

ですよね〜。

「構いませんわ！！」

なんですと！！

キャロルがOKしたよ…。

これ、浮気しても認める的な内容だよ？

「キャロル、意味が分かっているのですか！？」

あなたはそれで本当にいいのですか？」

さすがに俺もそれでいいのかと思う。

しかし、キャロルの決意は固いようだ。

「分かっていますわ。私が彼にとつて魅力的わたくしであれば問題ない事ですわ。

ルナハイネンの名にかけてこれを認めますわ」

「キャロル…。そこまでいうのならいいでしょう」

「これでいいのキャロル？」

「はい、私あなたの為がんばりますわ!」

「うふふ、決まりね」

母上はご満悦だ。

ていうか決定なんだ。

なんとというご都合主義。

父上羨ましいと言わない、あとで母上にお仕置きされますよ。

この後、正式に書類を作り、談笑をし、皆で食事を話し合いは終了した。

かくして、俺とキャロルの許嫁が成立したのであった。

次回へ続く

） 宜しくお願いしますわ、お義母様。

まだ、そうなるわけじゃないわ〜。

いえ、必ずそうなりますわ、お義母様。

）

第十一話 一緒にいるために（後書き）

本来の主人公エルトが出せるのはいつだろう…。

妖精事件とグラム家没落の時系列は原作で明らかになっていないため、
本作品で出てくることになっても突っ込み無用でお願いします。

第十二話 二人目×その後×旅へ(前書き)

思ったより話が進まなかった。

第十二話 二人目×その後×旅へ

～前回までのあらすじ～

キャロル・ルナハイネンですわ。

前回私は、彼と許嫁になりましたわ。

思えば初めて彼に声をかけた時からこうなる運命だったのですわ。自分の気持ちに気づき、告白し、受け入れてもらって、愛を育んで、ようやく許嫁にまなれましたわ。

次に私がすべきことは、花嫁修業、彼の理想になること、女王騎士になることですわね。

花嫁修業は週一でお義母様に教えていただくことに含まれますし、彼の理想になることは鋭意努力中ですわ。

あとは、女王騎士になる鍛錬ですわね。

うふふ、必ずなって見せましてよ、

私とロランの未来のためにも。

こちらスーク…じゃなくてロランです。

キャロルと許嫁になってから数か月経ち、

現在アルマ姫の十二歳の誕生パーティーが開かれております。

いつもの如く今日もイルマに会いに潜入ミッション決行中だ。

…よつと、無事到着！！

「ロラン！！！」

イルマが抱きついてきた。

柔らかいです。

もう、まな板や洗濯板ではないぞ。

立派なレディーですな。

まずは、マナの浄化をしてっと、これで良し。

堪能しつつ手早く浄化を行う。

イルマを抱き締め頭を撫でながら話す。

「イルマ元気にしてた？」

「ええ、けど寂しかったわ…、もっと会いに来なさいよロラン」

そりゃ寂しいよね、自由に出歩けないし、

自分から人に会いに行けないわけだし…。

「そっか、ごめんね。毎日会いに来れたらいいんだけど…。

女王騎士になったら毎日会いにこれると思うからそれまで我慢してね？」

「…分かったわ、それまで我慢してあげる」

若干拗ねた顔も可愛い。

「ありがとうイルマ」

「その代わりに…お、お願いを聞いてもらっわ」

「お願い？」

俺にできることなら何でも聞いてあげたいけど。

イルマのお願いってなんだろう？

「私がいつか表そとに出れるようになったら、
わ、私の…」

表に出れるようになったら…か、そっだねそっなるようにしてあげたい。

ん？

イルマはもじもじして赤くなっている。

なにか言いづらい事なんだろうか？

「イルマの？」

続きを促してあげる。

「わ、私の…、だ、旦那様になりなさい！！」

！？

まじですか！！

いろいろすっ飛ばし旦那様か…。

それぐらいなら…いや、すでにキャロルと許嫁だし…。

でも、イルマのお願いも聞いてあげたいし、

何よりそれを希望にしている方向に向かうかもしれない。

いや、それは言い訳か。

一番大事なのは当人の気持ちだよな。

「えっと、嬉しいけどイルマは俺でいいの?」

「アンタが好きなのよ私は!!」

「わかりなさいよ!!!…それとも私じゃダメ?」

イルマはデレ上目使い告白を放った!!

ロランに対し効果は抜群だ!!!!!!

「ダメなんかじゃない!俺もイルマが好きだ!!俺で良ければ嬉しいよ」

やっちまった。

…だが後悔はない!!

やっちまったが何とかなるさ。

俺が纏めて幸せにしてやる!!!!

「嬉しい!!!約束よ!!!必ず私の旦那様になりなさいよ!!!」

「うん、約束だ」

「でも、それまで待てないから…」

チュッ

イルマからキスをされた。

今度は頬でなく、唇と唇だ。

「ぶはっ、イ、イルマ!？」

「私の初めてよ。こ、光栄に思いなさい！
でも、これじゃ足りないんだから!！」

赤くなりもじもじしつつ続きを促すイルマ。

なんとという褒美!！」

据え膳食わねば男の恥!！」

遠慮なくいただきまーす!！」!！」

・
・
・
・

その後、時間いっぱいまでイルマといちゃついて過ごした。

会場に戻るときにルカのお兄さんとすれ違った。

もう、帰るのかな？

とりあえず、挨拶だけしてスルーし、

パーティー会場に戻りいつも通り過ごした。

それからさらに月日が経った。

アルトリア上級小等学校を無事卒業し十三歳になった。

俺は結局進学はせず、自分の腕を磨くことにした。

近頃の修行は主に祖母達と四対一の実戦だ。

この鬼どもめ。

連携が半端じゃねえ。

手加減くらいしろや!!

やり始めた頃なんか防御すらまならなかった。

断固反対、集団暴行!!

今ではなんとかこっちが押してるけどね。

やられっぱなしではいられません。

キャロルは許嫁になってから週一でこっちに来るようになってい
る。

母上監修による花嫁修業のためだ。

現在は料理をがんばっている。

最近の厨房はバトルフィールドと化している。

いろんな意味で…。

初めて食べた愛情たっぷりの手料理は…

…うん、とても酷かった。

まあ、毒物に耐性はあるから根性で食べたけど…。

母上の怒気を含む…もとい熱意ある指導を受け、現在努力中だ。

キャロルの頑張る姿も新鮮だ。

愛を感じる今日この頃です。

この分だと上達も早いだろう。

上手くなるのが楽しみだ。

同じ食べる愛情料理なら美味しい方がいい。

花嫁修業も条件の内だからキャロルも必死になってるようだし。

現に少しずつましになっていってる。

今は少し味が濃かったり薄かったりはするが、

食べれる範囲になってきた。

料理はこの調子でいいとして、花嫁修業つて後は何だろう？

裁縫や掃除とかかな？

いずれにしてもできないだろうな。

今までやったことないだろうし…。

まだまだ苦勞しそうだな。

今回は母上もスパルタだから

やったことないでは済まさないだろうしね。

ある意味嫁姑問題だよな、この花嫁修業って。

俺がどうこうできるわけじゃないし、

気にしてもしょうがないけど…。

花嫁修業が上手くいけばなんとかなるだろう。

ん？

爺ちゃんたちが集まっている。

なにしてるんだらう？

「ロラン、こっちに来い」

呼ばれた。

今日の修行は終わったし…なんだらう？

「なに？」

爺ちゃんたちの所へ移動する。

「わらわ達がロランの修行内容を考えたんじゃないがな」
「修行内容？」

現在も大概だと思っんですが。

「実力はついたが私達だけではロランの経験が不足する」

いや、かなりの経験値では？

あなた方は規格外だと思いますけど？

「だから他国を一人で旅してもらおうと思っ」

だからってなに？

説明飛ばしたね爺ちゃん。

「ある意味長期旅行よ、ロランちゃん」

長期旅行で、軽く言われても…。

母上やキャロルは知ってるのだろうか？

「それぞれの国でやることは大まかにこの紙に指示してあるでの」

あ、ここでいつもの無茶ぶりですね。

分かっていますとも。

チラリと紙に目を通す。

ん〜、内容や難しさがバラバラだ。

時間はかかるかもしれないけど、なんとかなるかな？

「好きな国から行くといい」

「出発は来週じゃ」

「準備はしっかりな」

「資金はこちらで用意するわ」

うん、稼げって言われても困る。

というか、本人の意思を無視して

とんどん拍子で話を進めるよな、うちの家族って。

「分かった。準備しとくよ。」

でも、母上やキャロルはこのこと知ってるの？」

「うむ、これから説得するのじゃ」

これからかよー！

「二人揃っているようだしな」

ちようど二人揃ってるけどさ。

高難度任務だと思っよ？

首を即座に縦に振るとは到底思えない。

「説得できるの？」

「皆で説得すればなんとかなるじゃろ」

ならないと思っただけど…。

疑問に思いつつ母上達のいる厨房へ向かった。

・
・
・

「いやです、認めません」

「いやですわ、会えないのは嫌ですわ！！」

だよー。

「ふむ、しかしのう…」

ぼそぼそと祖母ミリーねえちゃんが母上とキャロルになにかを呟く。

そんな簡単に二人が頷くわけが…

「わかったわ〜（ロランちゃんのため〜）、
でも一国ごとに帰ってきてね〜」

「わかりましたわ（これも二人の未来のためですわね）、でも一国ごとに帰ってきてほしいですわ」

頷いたよ！！

たった数秒の間に

いったい何を言ったんだか…。

しかも似たようなこと言ってるし。

「話は決まりだ」

「そうだな」

「そうね」

「来週からじゃそれまではお主も泊まると良い」

「もちろん、そうさせてもらいますわ」

「うっ、でもやっぱり寂しいわ」

母上はともかくとして話は纏まったな。

来週からか…、どこから行くところか？

左回りで、マクノイスからにしようかな。

ミサ皇女に手紙を出すのも今日だし。

行くことを伝えておこうか。

「ふむ、で、どこから行くのだ？」

「マクノイスからにするよ」

「あらあら、そういふこと？」
「む〜」

どういふこと？

キャロルがなんか母上みたいに拗ねてる？

「マクノイスでさせることはなんじゃったかの」
「えっと…」

もらった紙を見る。

マクノイスで行うこと

- ・自身の剣の材料の発見及び購入
- ・魔法騎士と闘うこと
- ・マクノイスにしかない珍しい魔獣や魔物と闘うこと
- ・社会勉強および自己鍛錬

「うーん、なんとかなるかな」

魔法騎士なんかはミサ皇女やアザラーク皇子のコネを頼るか。

一番の問題は剣かな。

「ならいいだろう。あとは定期的に手紙を出すようにな」
「週に一度でも構わんよ」
「手紙？分かったけど…」
「ミューズちゃんやキャロルちゃんが我慢できないものね」
「しょうがない娘達じゃ」
「そんなことないわよ」
「仕方ありませんわ」

あー、納得です。

週一ぐらいなら面倒でもないか。

この後、皆で食事や談笑をし、

ミサ皇女に手紙を書いて送り旅の準備をしたりした。

もちろん、キャロルともいちゃつきました。

せっかくの泊まりだしね。

キャロル、ゲットだぜ！！

某少年風に心の中で叫んだ。

翌週になった。

ちなみに初めに行くマクノイス魔法皇国は

アルシリアの南西にある大国で

マナを用いた魔法技術が発達しており、

魔法鉱物の生産も大陸一である。

俺は今さつき家族のみんなやキャロル、侍女や執事達に

行ってきますの挨拶をして国境付近まで走ってきた。

母上とキャロルがアレだったけど…。(あと侍女達も)

まあ、しばらく会えなくなるから仕方ないか。

帰ってきた時が大変かも…。

走るのをやめ歩きながら考える。

馬車を使わず走ってきたのは修行にもなるからだ。

高速で走れば動体視力も鍛えられるしね。

ちなみに手渡された所持金は…五千万カネーある。

渡しすぎだろ!!

素直に受け取った俺も俺だけど。

ルナハイネン家からも資金が出てたりして…。

しかも一か国ごとにもらえるみたいだし。

ホテルや宿屋とか長期で泊まるのなら割引も効くだろうに。

今回は武器やその材料を買ったために多くしてくれたにしても多いわ!!

お金に鞆かばん一つ使うんじゃないよ…。

うん、あれだ。

逆に無駄遣いを控えよう。

武器さえ安く抑えたらこれで数年かけて

五か国全部回ったとしてもお釣りがくるだろう。

お土産とかも大量に買うかな…。

倒したモンスターから毛皮や牙とか使える部分売れば

お金が減らなかつたりしてね。

そうこう考えているうちに俺は

国境の関所を抜けマクノイスに入った。

次回へ続く

） これでようやく楽ができる。

わらわ達も負けたくないしのう。

強くなったわね、ロランちゃん。

本当にな、可愛い子には旅をさせる計画成功だ。

）

第十二話 二人目×その後×旅へ（後書き）

話の都合上、ミサよりイルマを先に書くことに。

最初はマクノイス編の予定だった。次回はそれになるかと。

ジークとイルマは既に顔見知りだけど、

ロランとジークはお互い顔見知り程度なので、

邂逅は無しにしました。

まだ若いけどいちゃつけない年齢ではないので悪しからず。

アレは皆さんの想像に任せます。

では、次回も頑張りますか…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1493y/>

女王騎士物語の世界で生きる

2011年12月10日00時18分発行